

『古今著聞集』 卷第五「和歌第六」を読む(3)

谷 知子(代表者)
金井由貴子・大江あい子・蔡雅如・繩手聖子

本稿は、宮内庁書陵部蔵『古今著聞集』巻第五「和歌第六」一七八～一九九を大学院演習にて講読した注釈ノートである。現代語訳・語釈・解説を施した。各箇所を担当は、一七八・一八三・一八八・一九三・一九八金井由貴子(本学人文科学研究科日本文学専攻博士後期課程)、一七九・一八二・一八七大江あい子(本学人文科学研究科日本文学専攻博士後期課程)、一八〇・一八五・一九〇・一九五蔡雅如(本学人文科学研究科日本文学専攻博士後期課程)、一八一・一八六・一九一・一九六繩手聖子(本学人文科学研究科日本文学専攻博士後期課程終了)、一八四・一八九・一九四・一九九谷知子(本学文学部日本文学科教授)、である。

一七八 修理大夫顯季人丸影供を行ふ事

〔本文〕

元永元年六月十六日、修理大夫顯季卿、六條東洞院亭にて、柿下大夫夫人丸供をおこなひけり。件人丸の影兼房朝臣夢本あたらしく圖繪する也。左の手に紙をとり、右の手に筆を握て、とし六旬ばかりの人なり。其うへに讚を書。

柿下朝臣人麿畫讚一首并序

大夫姓柿下、名人麿、蓋上世之歌人也。仕持統・文武之聖朝、遇新田・高市之皇子。吉野山之春風、從仙駕而獻壽、明石浦之秋霧、思扁舟、而瀝詞。誠是六義之秀逸、萬代之美談者歟。方今依重幽玄之古篇、聊傳後素之新様、因有所感乃作讚焉。其詞、

和歌之仙 受性于天 其才卓爾 其鋒森然

三十一字 詞華露鮮 四百餘歲 來葉風傳

斯道宗匠 我朝前賢 涅而無滓 鑽之彌堅

鳳毛少彙 麟角猶專 既謂獨歩 誰敢比肩

ほのくくとあかしの浦の朝霧にしまかくれゆく舟をしぞ思

此讚、兼日に敦光朝臣つくりて、前兵衛佐顯仲朝臣清書しけり。當日影の前に机をたて、飯一坏・菓子、やうくの魚鳥等をすへたり。但物にてつくりて實物にはあらず。前木工頭俊頼朝臣・加賀守顯輔朝臣・前兵衛佐顯仲朝臣・大學頭敦光朝臣・少納言宗兼・前和泉守道經・安藝守爲忠等也。次饗膳をすゆ。次柿下初獻、侍人等鸚鵡の盃・小銚子をもちて簀子敷に候けり。亭主顯季卿申されけるは、「初獻は和歌の宗匠つとめらるべし」。滿座一同しければ、俊頼朝臣座を立て影の前にすゝむ。顯輔盃をとりて人丸の前にをく。道經小銚子をとりて、盃に入て机の上にをく。各座にかへりつきて勸盃あり。二獻の程に、式部少輔行盛來くはゝる。右中將雅定朝臣又來られり。亭主のいはく、「先人丸の讚を講ずべき也。」人ぐ所存不同。亭主猶讚を前に講ずべきよし申されければ、机の前に文臺を置て圓座をし

く。件讚、白唐紙二枚に書たり。右兵衛督又來らる。讚をひらきて文臺にきて、これを講ぜらる。次和歌を講ず。題云、「水風晚來」。敦光朝臣序をかきけり。講じをはる程に、敦光朝臣朗詠をいたす、「新豐酒色云々」。次亭主同句を出す。又詠吟せられて云、「保能々と明石浦之朝霧に」。次敦光朝臣詠吟していわく、「多能免つ、不來夜數多爾」。衆人興に入て、おの／＼後會を約しけり。

夏日於三品將作大匠水閣同詠水風晚來和歌一首并序

大學頭敦光

我朝風俗、和歌爲本。生於志、形於言。記一事、詠一物。誠爲諷諭之端、長者君臣之美。是以將作大匠每屬觀天之餘閑、凝詞露於六義、叶賞心者、花鳥草蟲之逸興。應嘉招者、香衫細馬之群英。今日會遇、只是一揆。方今流水當夏兮冷、風迎晚兮來。蘆葉戰以淒々。渚煙漸暗、杉標動以颯々。沙月初明、情感不盡。聊而詠吟。其詞曰、
風ふけば浪とや秋の立ぬらんみぎはすゞしき夏の夕ぐれ

於柿下大夫影前、詠水風晚來和歌

修理大夫顯季

夕づくよむすぶ泉もなけれどもしがのうら風すゞしかりけり

右兵衛督實行

おほぬさや夕浪たつる風ふけばまだきに秋といはれの、池

内藏頭長實

夕されば河かせずゞし水のうへに浪ならねども秋や立らん

右馬頭經忠

槇ながすあなしの川に風ふきてこの夕ぐれぞ浪さやにたつ

右近中將雅定

夕まぐれなにはほりえに風ふけばあしの下葉ぞ浪におらるゝ

源俊頼

ゆふ日さす野守のかゞみかひもなくふれける風に影しそはねば

中務權大輔顯輔

まだきより秋は立田の河かぜのすゞしき暮に思しられぬ

散位道經

手にむすぶいさゝせがはのまし水にたもとすゞしく夕風ぞふく

式部少輔行盛

水のあやをふきくる風の夕月夜浪のたつなる衣かさなむ

散位顯仲

夕さればなつみの川をこす風のすゞしきにこそ秋もまたれず

少納言宗兼

谷河の北より風のふきくればきしも浪こそすゞしかりけり

皇后宮少進藤原爲忠

あかねさすひのくま川の夕かげに瀬々ふく風は秋ぞ來にけり

〔現代語訳〕

元永元年六月十六日、修理大夫顕季卿が、六條東洞院亭において、柿本大夫丸供を行った。例の人丸の絵像（を兼房朝臣の夢にもとづく）新しく描いたものである。左の手に紙を取り、右の手に筆を握って、年は六十歳ぐらいの人である。その上に讚を書いてある。

柿本朝臣人麿の画讚一首ならびに序

大夫、姓は柿本、名は人麿、まさしく上代の歌人である。持統・文武天皇の聖代に仕えて、新田・高市の皇子に遇した。吉野山の春風は、行幸に随行して言祝ぎの歌を奉り、明石の浦の秋霧には、小さな舟を想像して、詩歌で思いを述べた。実にこのことは和歌の六体そのものであり、永遠の美談といえるか。近頃は、幽玄で古風な絵を世に重んずるので、たまたま新傾向の絵画を手に入れて、感慨を催したゆえに、その時に讃を作った。その詞に、

和歌の仙は、その性を天から授かり、その才は人より傑出し、そのほこさはおごそかである。三十一字の美しく巧みに表現した詞の花はあざやかで、四百年余りの間、後世に遺風は伝えられてきた。歌道の師匠にして、我が国の古き先達である。汚そうにも汚しようがなく、傷つけようにも傷つけようがない。鳳凰の羽毛のように比類なく、麒麟の角のようにいっそう独特である。すでに言われているように他に類なく優れており、誰もが決して肩を並べることができないであろう。

(ほのぼのと)夜が明けていく頃、明石の浦は朝霧に包まれているが、一艘の小舟が島陰に隠れていくのを私はしみじみと見ている。

この讃は、あらかじめ敦光朝臣が作り、前兵衛佐頭仲朝臣が清書したのである。当日絵像の前に机を立てて、ご飯を一杯、菓子、様々な魚や鳥などを置いた。しかしながら別の材料で模造したもので本物ではない。前木工頭俊頼朝臣、加賀守頭輔朝臣、前兵衛佐頭仲朝臣、大学頭敦光朝臣、少納言宗兼、前和泉守道経、安芸守為忠など(が作った)のである。次に饗膳を置く。次に柿本の初献は、侍人などが鸚鵡の盃・小銚子を持ち簀子敷にお仕えしていた。主人(顕季)が仰ることは、「初献は和歌の師匠が務められるべきである」。一同の人々がみな同意したので、俊頼朝臣が席を立てて絵像の前に進んだ。頭輔が盃を持って人丸の前に置いた。道経が小銚子を持って、盃に(酒を)入れて机の上に置いた。各々が席に戻り勸杯があった。二献の頃に、式部少輔行盛が来て加わった。右中将雅定朝臣も同じように来られた。主人が言われた。「まず人麻呂の讃を読みあげるべきである」。人々の意向はまちまちであった。主人はやはり讃を先に読みあげるべき由を仰ったので、机の前に文台を置いて円座を敷いた。前述の讃は、白唐紙二

枚に書いてある。右兵衛督（藤原実行）が同じように来られた。讀を開いて文台に置いて、これを読みあげられた。次に和歌を読みあげた。題は、「水風晚来」。敦光朝臣が序を書いた。読みあげ終わる頃に、敦光朝臣が詠吟をいたす。「新豊酒色云々」。次に主人（顕季）が同じ句を声に出す。また詠吟なされて言うことには、「ほのぼのと明石の浦の朝霧に」。次に敦光朝臣が詠吟して言うことには、「たのめつつこぬ夜あまたに」。多くの人は深くおもしろがって、それぞれ後日の再会を約束した。

夏の日に三位木工頭の水閣で同じく水風晚来を詠じた和歌一首および序

大学頭敦光

我が日本のならわしは、和歌をはじめりとする。（歌は人の）心に生じたものが言葉として表現される。（歌で）一つの事柄を記し一つの物を詠ずることが、他事によそえ、物に託してそれとなくさとす端緒となり、長い間君臣の美を表わしている。こういう次第で木工頭（顕季）が宮中での勤務の暇をみては、詩句に技巧を凝らし、風流心を満たすのは、花鳥草虫の楽しみである。お招きにに応じて来たのは、よい香をたきしめた衣を纏い良馬に乗った俊英たちである。今日のめぐりあいは、ただ同じ思いからである。まさしく今流水が夏という季節に出会い涼感を増し、涼風は夕方になって吹きそめる。葦の葉が（風に）ふるえ涼し気な音を立てている。渚の靄は次第に夕闇に隠れ、杉の梢は（風に）動いてざわざわと音を立てている。砂上を照らす月はようやく明るくなり、情感は尽きない。かりそめに詠吟する。その詞が言うことには、

風が吹けば波となって秋が立つのだろうか。水際が涼しい夏の夕暮れであることよ。

柿本大夫の影前で、水風晚来ということ詠じた和歌

修理大夫顕季

夕月夜に手ですくう泉の水もないが、志賀の浦風は涼しいことであるよ。

右兵衛督実行

大きな幣帛を立てているところへ、夕波を立てる風が吹くと、まだ夏とはいえ早くも立秋になったと言いたくなくてしまうよ。磐余野の池では。

内蔵頭長実

夕方になると川風が涼しい。水の上に浪が立つのではないが秋が立つのであろうか。

右馬頭経忠

槇を流す穴師の川に風が吹いて、この夕暮れ時に浪がしきりに立っている。

右近中将雅定

夕暮れになり難波の堀江に風が吹くと、葦の下葉も浪に折られるよ。

源俊頼

夕日が差す野中にある溜まり水は野守の鏡といわれ甲斐がない。触れている風のせいで影が添わないので。

中務権大輔頭輔

まだ夏のうちから秋は立ったことだなあ。竜田川の川風の涼しい夕暮れに思い知られるよ。

散位道経

手ですくう小さな瀬川の増し水に加えて、袂を涼しく夕風が吹き抜けてゆくことよ。

式部少輔行盛

水面に模様を織るように風が吹きつける夕月夜。浪が立って裁つその衣を貸してほしい。

散位頭仲

夕方になると夏実の川を越えてくる風が涼しいので、秋に早くなつてほしいとは思わない。

少納言宗兼

谷河の北から風が吹いてくるので、岸も浪が涼しいことだなあ。

皇后宮少進藤原為忠

(あかねさす) 檜隈川の夕暮れの光に、あちこちの瀬に吹き渡る風がなんとも涼しく秋が来たことだなあ。

〔語釈〕

○元永元年 一一一八年。鳥羽天皇の時代。○修理大夫顯季卿 藤原。天喜三年(一〇五五)生、保安四年(一一二三)没。藤原隆経男。母は白河院唯一の御乳母と称される藤原親子。母が白河院より格別の恩寵を被り、その恩遇が顕季とその子弟にも及んだため、顕季は各地の国守を歴任、財を蓄え累進し、修理大夫、院別当、正三位に叙される。本説話の人麻呂影供歌会は、実質的な人麻呂影供の創始として知られる。歌道六条藤家の祖。○六條東洞院亭 六条大路の南、東洞院大路の東に面した顕季邸。中院と呼び、鳥羽天皇の御所などにもなった。○柿下大夫人丸供 人麻呂影供ともいう。歌聖柿本人麻呂を祭る儀式で、歌人たちが人麻呂の肖像を掲げ、和歌を献じることと和歌の道の跡を踏もうとした。この後、人麻呂影供は六条家における歌道継承のシンボルとなり、画像の継承者が六条家歌学の正統を継ぐ者とみなされるようになる。鎌倉時代以降はあわせて歌合なども行われ、影供歌合がつぎつぎと生み出された。

○影 絵姿。肖像画。○兼房朝臣 藤原。長保三年(一〇〇一)生、延久元年(一〇六九)没。中納言兼隆男。母は左大弁源扶義女。播磨・讃岐などの国守を歴任。○夢本 本文「夢(本ノママ)」は「夢みてあたらしく」と続くものか。『十訓抄』(上・四ノ二)によると、歌をうまく詠みたいと日頃から人麻呂を念じていた兼房の夢に人麻呂が現れた。夢から覚めた兼房は、その姿を絵師に描かせ毎日拝礼していたが、その御利益のおかげか以前よりよい歌が詠めるようになった。兼房は、臨終に際し、この絵像を白河院に献上したが、後にこれを顕季が借りて写したものが、本説話の人麻呂影である。同様の記述は、『古今著聞集』(巻第五和歌第六・二〇四)にもあり、兼房の正本が、後冷泉天皇の皇后である小野皇太后宮に伝えられた後に焼失したこと、顕季の影写本が正本となり伝来していく過程が記されている。○讚 人麻呂の絵像をほめたたえる文章。○新田・高市之皇子 天武天皇の皇子たち。○吉野山之春風、從

仙駕而獻壽 「幸于吉野宮之柿本朝臣人麻呂作歌」(『万葉集』巻一、三六〇三九)をさすか。○仙駕 乗り物、転じて行幸のこと。○明石浦之秋霧 「ほのぼのと」詠のこと。○瀝詞 言葉を滴らせるの意。○六義 『古今集』真名序にいう「風」「賦」「比」「興」「雅」「頌」のこと。○後素 絵画の異名。○其詞 底本では「日」を欠く。『朝野群載』『本朝統文粹』では「辞曰」とする。○温而无滓 「温」は、三本及び『朝野群載』『本朝統文粹』においては「涅」で、黒に染めるの意。「滓」は、三本及び『本朝統文粹』では「緇」で、黒く染まる意、『朝野群載』では「滓」で、ぬかるみの意に改めた。○鳳毛少景 「景」は、三本および『朝野群載』『本朝統文粹』では「景」で、類の意に改めた。○ほのぼくとあかしの浦の朝霧にしまくれゆく舟をしぞ思 『古今集』(巻九・羈旅・四〇九)の左注に「この歌は、ある人いはく、柿本人麿が歌なり」とある。「ほのぼのと」は枕詞であるとともに、明石は「明かし」に通じるので、「ほのぼのとあかし」は歌の実景でもある。○敦光朝臣 藤原。康平六年(一〇六三)生、天養元年(一一四四)没。右京大夫藤原明衡男。母は平実重女。官途は不遇だったが、当代随一の文章家で、その手になる詔勅・任官申文・勘文・漢詩の類は膨大な数にのぼる。その死により、平安時代の漢詩の幕は閉じられたと評価されるほど、その存在は大きかった。○顯仲朝臣 藤原。康平二年(一〇五九)生、大治四年(一一二九)没。藤原資仲男。母は源経頼女。陸奥守藤原基家の養子になる。和歌に秀で数々の歌合に出詠。○俊頼朝臣 源。天喜三年(一〇五五)生、大治四年(一一二九)没。源経信男。母は土佐守源貞亮女。俊恵の父。『堀川百首』を企画・成功させるとともに、多数の歌合に出詠、しばしば判者となり、堀川院歌壇の中心人物として活躍する。『金葉集』撰者。○顯輔朝臣 藤原。寛治四年(一一九〇)生、久寿二年(一一五五)没。藤原顯季男。母は藤原経平女。清輔の父で、顯昭の養父。早くから自邸で歌合を催すなど、父の後継者として、歌壇における六条家の地位を確立。崇徳院の院宣により、『詞花集』を撰集する。没する前に顯季から受けた人麻呂影を清輔に伝えるが、ここに世襲的歌道家としての萌芽が見える。○宗兼 藤原。生没年未詳。正四位下近江守隆宗男。母は肥後守義綱女。平忠盛の後妻である池禪尼の父。『千載集』に一首入集。○前和泉守道經 藤原。生没年未詳。讃岐入道顯綱男。母は美濃守藤原隆経女。長治元年(一一〇四)から保延

四年(一一三八)にかけて多数の歌合に参加。『金葉集』以降の勅撰集に二〇首入集。○爲忠 藤原。生年未詳、保延二年(一一三六)没。藤原知信男。母は藤原有佐女。藤原為業(寂念)、為経(寂超)、頼業(寂然)の常磐三叔の父。藤原顕季・顕輔の歌合や歌会で活躍。二度にわたり「為忠家百首」を主催し、若き日の藤原俊成や源頼政に習作の場を提供する。『金葉集』以下の勅撰集に入集。○鸚鵡の盃 鸚鵡貝、青貝、阿古屋貝など真珠光沢のある貝殻で造った杯。また、鸚鵡貝の形に似せた杯。○行盛 藤原。承保元年(一〇七四)生、長承三年(一一三四)没。藤原行家男。母は藤原実範女。『金葉集』に三首入集。○雅定朝臣 源。嘉保元年(一〇九四)生、応保二年(一一六二)没。源雅実男。母は勘解由判官藤原経生(または田上次郎)女。有職に関して意見を徴せられることが多く、出家後もしばしば公事の諮問にあずかった。笙と胡飲酒の舞の名手である。また、藤原顕季の婿となったことから和歌をたしなみ、『金葉集』以下の勅撰集に一九首入集するなど歌人としても秀でていた。○亭主猶讃を前に講ずべきよし申されければ底本、「ば」なし。学・三本により補う。○右兵衛督 藤原実行。承暦四年(一〇八〇)生、応保二年(一一六二)没。藤原公実男。母は藤原基貞女。待賢門院璋子は異母妹。三条高倉に邸宅のひとつがあったため三条と号し、三条家の始祖となる。和歌にも優れ、『金葉集』以下の勅撰集に二三首入集。『古今著聞集』(巻第五和歌第六・一五四)などに和歌に関する逸話が見られる。○序をかきけり 底本「りけり」。学・三本「けり」。○新豊酒色云々 『和漢朗詠集』(下・酒)に「新豊酒色 清冷於鸚鵡之盃中 長楽歌声 幽咽於鳳皇之管裏」とある。『古今著聞集』(巻第一八飲食第廿八・六三五)でも、この句が詠じられている。○多能免つ、不來夜數多爾 「たのめつつ来ぬ夜あまたになりぬれば待たじと思ふぞ待つにまされる」歌は、『拾遺集』(恋四・八四八)、『和漢朗詠集』(下・恋)に人麻呂作として収載されている。また、『俊頼髓脳』や『古来風躰抄』は、秀歌例として当該歌を挙げる。○三品將作大匠 三品は三位、將作大匠は木工頭(一説に修理大夫)の唐名。○長者 「者」は、三本及び『柿本影供記』では「著」。○逸興 格別に興味深いこと。また、そのさま。『柿本影供記』では「逸韻」で、風雅の意。○群英 「英」は、底本「美」、学本「美」。ここでは三品および『柿本影供記』の「英」に従う。○風迎晚兮來 『柿本影供記』は「涼風」とする。○渚煙漸暗

「渚煙」は渚に立ちこめる靄のこと。敦光は『本朝無題詩』六「夏日池台即事」においてもこの語を用いている。○沙月初明 『柿本影供記』によると、この日の日中には雨が降っていた。○風ふけば浪とや秋の立ぬらんみぎはすゞしき夏の夕ぐれ 「立つ」は「波が立つ」と「秋が立つ」の掛詞。二句目の「浪とや」は、『柿本影供記』においては「浪にや」。「河風のすずしくもあるかうちよする浪とともにや秋は立つらむ」(『古今集』秋上・一七〇・紀貫之)の影響を受けたものか。○詠水風晚來和歌 底本「詠」なし。学・三本により補う。○夕づくよむすぶ泉もなけれどもしのうら風すゞしかりけり 志賀は、近江国、琵琶湖西南岸の地。地理的特徴から、津・浦・波・山などと共に詠まれ、院政期以降急増する地名である。他出『六条修理大夫集』『和歌一字抄』。○おほぬさや夕浪たつる風ふけばまだきに秋といはれの池 「おほぬさ」は大きな串につけた幣帛のことで、当該歌では晩夏の風物である夏越の祓の印象を重ねたか。「たつ」は、幣帛を「立つ」と夕波が「立つ」、秋が「立つ」の掛詞。「いはれの」は「言はれ」と「磐余野」の掛詞。○夕されば河かぜすゞし水のうへに浪ならねども秋や立らん 「立」は、浪が「立つ」と秋が「立つ」の掛詞。敦光詠と同様に、貫之歌の影響を受けたものか。○槇ながすあなしの川に風ふきてこの夕ぐれぞ浪さやにたつ『柿本影供記』では、第四句「この夕暮れは」。「あなしの川」は大和の巻向川の別名。『万葉集』には「あなしの川」を詠んだ歌が二首あり(巻七・一〇八七、一一〇〇)、いずれも『人麻呂歌集』に拠るものである。○夕まぐれなにはほりえに風ふけばあしの下葉ぞ浪におらるゝ、「なにはほりえ」は『日本書紀』によると、仁徳天皇が開掘して整えた水路。○ゆふ日さす野守のかゞみかひもなくふれける風に影しそはねば 「野守の鏡」は、院政期の歌学書がこぞって取り上げた歌語で、諸説相違がある。当該歌作者である俊頼は『俊頼髓脳』において、のちに『新古今集』(恋五・二五三二)の出所不明の古歌「はしたかの野守の鏡得てしがな思ひ思はずよそながら見む」に注して次のような説をあげる。昔、天智天皇が鷹狩りをしていた時、風にあおられて鷹の行方を見失ってしまった。そこで、野守に問うと「岡の松の枝の上枝に南向きに止まっている」と言い当てた。どうしてそれがわかったのか天皇が野守に問うと、「身分が低く天皇に顔を直接見せられないので、下を向いてたまった水を見てみると、それに映ったため鷹の行方が分かった」と答え

たという。それゆえ「野守の鏡」とは、野の中に溜まった水たまりであるとする。俊頼はこの説を実際の詠作に供したということになる。当該歌は、納涼の要素を持たず、他の参加者詠と一線を画している。なお、『柿本影供記』では、第三句「かひもなし」。○まだきより秋は立田の河かぜのすゞしき暮に思しられぬ「立田」の「立」は、秋が「立つ」との掛詞。「童田川」は大和国の歌枕。紅葉の名所として知られる。○手にむすぶいさゝせがはのまし水にたもとすゞしく夕風ぞふく『柿本影供記』では、第二句「いささおがは」、第四句「涼しき」。○水のあやをふきくる風の夕月夜浪のたつなる衣かさなむ「たつ」は「立つ」と「裁つ」の掛詞。○夕さればなつみの川をこす風のすゞしきにこそ秋もまたれず「なつみの川」は、奈良県吉野郡吉野町菜摘付近を流れる吉野川の別称。菜摘川とも。『柿本影供記』では第五句「秋もまたれね」。○谷河の北より風のふきくればきしも浪こそすゞしかりけり『柿本影供記』では、下句「きしは南ぞすゞしかりける」。○あかねさすひのくま川の夕かげに瀬々ふく風は秋ぞ來にけり 檜隈川は大和国の歌枕。「ささのくま檜隈川に駒とめてしばし水かへ影をだに見む」(『古今集』巻二〇・神遊びの歌・一〇八〇)の影響から、「影」を見ることを生かして詠むことが多い。『柿本影供記』では、第五句「秋ぞきにける」。

〔解説〕

一、巻第五「和歌第六」の後記抄入と一七八段

永積安明氏は、『古今著聞集』(大系) 解説において、「和歌篇には四十段におよぶ集中最大量の抄入がある」と指摘している。一六六段から二〇二段までが『十訓抄』からの抄入であるが、この『十訓抄』抄入部分を除外すると、「一七八段は、まだ十訓抄からの抄入のなかつた時に、人丸影に関する二〇四段の裏書あるいは裏書的な注記として記入されたもの」と推測する。

ゆえに、個々の段における和歌説話からの逸脱や不手際は、『古今著聞集』の主題や編著者の発想を理解できなかつた後人による追記であることを自ら示すものであると論じている。

二、人麻呂影供の創始と展開

従来、人麿影供は、顕季が歌道家を組織しようとする意識から行った儀式であると捉えられてきたが(山田昭全「柿本人麿影供の成立と展開―仏教と文学との接触に視点を置いて―」『大正大学研究紀要』第五一輯、一九六六年三月)、佐々木孝浩氏は、初度の影供は入念に企画されたものではなく、「子孫達が自家の伝統を保証する存在としての利用価値を見出し」繰り返し催されていくことによって、権威が付加され重んじられるようになったのではないかと論じている(「六条顕季邸初度人麿影供歌会考」『国文学研究資料館紀要』第二二号、一九九五年三月)。

(金井由貴子)

一七九 望夫石の故事並びにしらゝの姫公の歌の事

昔夫婦あひ思て住けり。男いくさにしたがひて遠くゆくに、其妻をさなき子をぐして、武昌の北の山までをくる。男の行をみてかなしみたてり。男歸らずなりぬ。女その子を負て立ながら死ぬるに、化して石となれり。其かたち、人の子をおひてたてるがごとし。これによりて、此山を望夫山となづけ、其石を望夫石といへり。くはしくは幽明録に見えたり。しらゝといふ物語に、しらゝの姫公、おとこの少將のむかへにこんと契て、遅かりしをまつとてよめる、とあるは此心なり。

たのめつゝきがたき人を待ほどに石に我身ぞ成はてぬべき

〔現代語訳〕

昔夫婦がお互いに愛し合つて住んでいた。男が軍隊に従つて遠くに行くので、その妻は幼い子どもを伴つて、武昌の北の山まで送った。男が行くのを悲しんで立っていた。男は帰らぬままとなった。女はその子を背負つて立ちながら死んだので、変化して石になってしまった。その形は、人間が子どもを背負つて立っているかのようであった。この故事によつて、この山を望夫山と名付け、その石を望夫石というのである。くわしくは幽明録に見受けられる。

しらゝという物語に、しらゝの姫公は、夫の少将が迎えにくると約束して、(来るのが)遅いけれども待っているといつて詠んだ、とあるのはこの心情である。

あてにさせながら、来そうもない人を待っているうちに、きつと私のからだは石になってしまふに違いない。

〔語釈〕

○望夫石 中国武昌郡陽新県(湖北省)の北山山頂にある石。○しらゝ、『更級日記』に、「源氏の五十余巻、櫃に入りながら、ざい中将、とほぎみ、せり河、しらゝ、あさうづなどいふ物語ども、一袋とり入れて、得て帰る心地の嬉しさぞいみじきや」とある。また、『和歌色葉』にも「在原中将の伊勢物語、(中略)山蔭の中納言、有馬の王子、海人しらゝ」と多くの書名とともに記されている。後年の『浄瑠璃十二段』にも「よみけるさうしはとれぐぞ。源氏さごろも古今万葉伊勢物語、しらゝ、おちくほきやうたらう」とあるので、広く知られた物語であったと考えられる。

○幽明録 宋の劉義慶の作。怪異譚が集成され、『隋史』によれば二〇巻ほどあったが散逸したという。その一部は、『鈎沈』『列異伝』などに伝えられた。『列異伝』には「望夫石」の題で、「武昌陽新県北山上有望夫石、一状若人立者。伝云。昔、有貞婦、一其夫従_レ役、遠赴_二国難_一。一婦携_二幼子_一、一餞_二送此山_一。一立望而形化為_レ石」とある。○たのめつ、きがたき人を待ほどに石に我身ぞ成はてぬべき 『夫木和歌抄』の他歌学書などにも見える。↓解説参照。

〔解説〕

「たのめつ、」の歌をめぐる話を載せる歌学書などを、以下に引用しておく。

『和歌童蒙抄』

しらゝの物語の第二にあり。しらゝの姫君、男の少将のむかへにこんと契りておそかりしを待とてよめる也。石に成ぬとよめるは、幽明録に、昔貞婦ありき。夫軍に従ひて遠く行。をさなき子をして武昌北山まで送る。夫の行を望てたてり。夫婦らずなりぬ。婦立ながらしぬ。化して石に成ぬ。形人のたてるが如し。其後其山を望夫山といふ。其石を望夫石と云々々。望夫石、世説曰、武昌北山上有云々。状若_レ人。古老伝云。昔有_二貞婦_一。其夫

従^レ役。遠越^二国疆^一。婦携^二弱子^一餞送。此上立而為^レ石。

『和歌色葉』

此歌はしらゝの物語にあり。しらゝの姫君を、男の少将のむかへにこむと契りておそかりしをまつとてよめる也。石になりぬべきとよめるは、もろこしに昔夫婦あひ思ひてすみけり。夫いくさにしたがひて遠く行くに、その婦をさなき子をぐして、武昌の北山までおくる。夫の行くを見て悲しみたてり。をとこみえずなりぬ。そのめこをおひて立ちながら死ぬるに、化して石になれり。その石の形、人の子を負ひて立てるがごとし。これによりて、其山を望夫山と名づく。その石をば望夫石といへり。委は幽明録にみえたり。

『十訓抄』

昔、夫婦相思ひて住みけり。夫軍にしたがひて遠く行くに、其の妻少さき子を具して、武昌の北の山までおくる。男の行くを見てかなしびたてり。男かへらずなりぬ。女その子を負ひて立ちながら死ぬるに、化して石となれり。其の姿、人の子を負ひて立てるがごとし。これによつて、此の山を望夫山と名づけ、其の石を望夫石といへり。くはしくは幽明録に見えたり。しららといふ物がたりに、しららの姫君、男の少将の迎にこんと契りて、おそかりしを待つとてよめるとあるは、此の心なり。

たのめつつきがたき人を待つほどに石にわがみぞなり果てぬべき

(大江 あい子)

一八〇 松浦佐夜姫夫の渡唐に別を惜む事

〔本文〕

我國の松浦佐夜姫といふは、大伴狭手磨が女也。おとこ、帝の御使に、唐へわたるに、すでに船に乗て行とき、其別を惜みて高き山の嶺にのぼりて、はるかにはなれゆくをみるに、かなしみにたへずして、領巾をぬぎてまねく。み

るもの涙をながしけり。それより此山を、領巾磨のみねといふ。此山は肥前國にあり。松浦明神とていまにおはしますは、かのさよ姫のなれるといひつたへたり。この山を松浦山といふ。磯をば松浦がたともいふなり。萬葉に此心の歌あり。

とをつ人まつらさよひめつまごひにひれふりしよりをへる山の名

〔現代語訳〕

我が国で松浦佐夜姫というのは、大伴狭手磨の妻である。男が、天皇の使として、唐へ渡るにあたって、すでに舟に乗って行こうとした時、(妻は)その別れを惜しんで高い山の峰に登り、遙か遠くへ離れて行く舟を見て、悲しさに堪えきれず、領巾を脱いで招いたのだった。見ていた人は涙を流した。それからこの山を、領巾振山というようになった。この山は肥前の国にある。松浦明神といって現在も鎮座まします神は、この佐夜姫がなられた神であると言ひ伝えている。この山を松浦山という。磯を松浦湯とも言うのだ。『万葉集』に、この心を詠んだ歌がある。

松浦佐夜姫が夫を恋慕って領巾を振った時から、名づけられた山の名であることよ。

〔語釈〕

○松浦佐夜姫 松浦佐用姫とも。大伴狭手磨の妾。松浦は肥前国の松浦郡の義。佐夜姫の領巾振り伝説に因んで制作した歌七首が『万葉集』巻五に載録される。『肥前風土記』では領巾を振った女性の名は篠原村の娘、弟日姫子(おとびひめこ)であったとする。○大伴狭手磨 大伴金村大連子。『日本書紀』『肥前風土記』『万葉集』は狭手彦、渡航先を朝鮮とする。『和歌童蒙抄』では、「此狭手彦連事、少しかれこれ違ひたり」とあり、狭手彦の行き先にまつわる諸説の存在を示す。『袖中抄』では、狭手彦と狭手磨の異同を問題視し、天平勝宝元年(七四九)に遣唐使で渡唐したのが狭手磨(『遣唐使大伴宿祢佐手磨記』)、天平二年(七三〇)以前に宣命を受けて朝鮮へ渡航したのが狭手彦とする。『十訓抄』『古今著聞集』は狭手磨である。○領巾 比礼とも書かれる。両肩の後ろから前に掛けて垂らす、一幅また二幅仕立ての布帛。天の日矛の将来した八種の宝の中に「浪振る比礼、浪切る比礼、風振る比礼、風切る比礼」(『古

事記』中巻)など、浪と風を操る呪力を持った領巾が見える。領巾を振ったのは、ただ別れを惜しんだだけではなく、領巾の威力によって狭手磨を呼び返そうとする呪術的行為。○領巾磨のみね ひれふるやまとも。松浦山とも言われる。佐賀県唐津市鏡にある鏡山のこと。『肥前風土記』は「褶振峯」と書く。○松浦明神 鏡山の山頂にある鏡神社の祭神。佐夜姫を松浦明神の御神体とする説は、『和歌色葉』『十訓抄』『古今著聞集』に見える独自の説。吉田修作「伝承の〈筑紫をとめ〉—松浦佐用姫」(『福岡女学院大学紀要』第二号、一九九二年二月)参照。○松浦がた 松浦の沖、松浦の川とも詠まれた。松浦河の河口部を中心として唐津湾に面した海浜部。唐へ船出する港であったため、「松浦瀉もろこしかけて見渡せば境は八重の朝霞かも」(後鳥羽院集・六二九)などのように、唐土を詠み込んで眺望の心を表現する歌も多かった。○とをつ人まつらさよひめつまごひにひれふりしよりをへる山の名 「とをつ人」は、「まつ」の枕詞。「松」を「待つ」と響かせる。この歌は『万葉集』巻五の八七一番歌が初出で、『和歌童蒙抄』『古来風体抄』『袖中抄』『顕注密勘』にも見える。この歌の作者は「言ひ継ぎ語り継ぎ」から山上憶良とする説と、『遊仙窟』と「遊於松浦河歌」との類似性から大伴旅人とする説に分かれる。小島憲之「遊仙窟の投げた影」(『上代日本文学与中国文学』中巻、塙書房、一九六四年)、植垣節也「山上憶良—領巾振り伝説歌の表現を通して」(『論集 万葉集』第一集、笠間書院、一九八七年)、原田貞義『読み歌の成立—大伴旅人と山上憶良—』(翰林書房、二〇〇一年)参照。

〔解説〕

類話は『十訓抄』(六ノ二二)に見える。

この松浦佐夜姫の領巾振り伝説の一番早い例は、『肥前風土記』と『万葉集』巻五に見える。『肥前風土記』には、大伴狭手磨と篠原村の弟日姫子(日下部君等祖)をめぐる伝承、いわゆる、弟日姫子伝承が載録されている。弟日姫子伝承は、以下三つの部分からなる。

- ①夫のくれた鏡の緒が切れて鏡が河に沈んだという「鏡の渡」の話
- ②夫婦の悲別と「褶振峯」の地名の由来

③三輪山式伝説に酷似する弟日姫子の後日談

一方、『万葉集』の松浦佐夜姫伝承は、①、③の話を切り捨て、悲別と「褶振峯」の地名の由来だけを取り上げた。また、女主人公を弟日姫子ではなく、松浦佐夜姫に換えた。

後世に、「かの松浦佐用姫が、雲井の船を見おくりて、石となりけん昔」（『曾我物語』巻四）、「されば其執心爰にとどまりて、一つの石と成しより」（『未刊謡曲集』一三・「比礼振山」）など、松浦佐用姫が悲しみのあまり石に化す後日談が見える。清田正喜氏は、『十訓抄』に続いて、『古今著聞集』に中国の「幽明録」の望夫石説話と松浦佐夜姫伝説を併記していることから二つの話が混同しはじめたと指摘し、また、「貞婦」と「国難に赴く」という貞婦節女を表彰するという時代要求から生じたものと考えている。清田正喜「松浦佐用姫伝説とその文学」（『西南学院大学 文理論集』巻七、一九六七年）参照。

（蔡 雅如）

一八一 或内舍人大納言の女を盗みて奥州淺香郡に逃ぐる事

〔本文〕

むかし大納言なりける人の、御門にてたてまつらんとてかしづきける女を、うどねりなるものぬすみて、みちの國にいにけり。あさかの郡あさか山に庵結て住ける程に、男のほかへゆきたりけるまに、立いで、山の井にかたちをうつしてみるに、ありしにもあらず成にける影をはぢて、

淺香山かげさへみゆる山の井のあさくは人を思ふものは

と木にかきつけて、みづからはかなく成にけりと、やまとものがたりにしるせり。

〔現代語訳〕

昔大納言であった人が、帝に差し上げようと大切に育てていた娘を、内舍人であった者が盗んで、陸奥国に行った。

安積の郡浅香山に庵を作つて住んでいたところに、男が他所に出かけていた間に、(女が)外に出て山の井に姿を映して見たところ、以前の面影とは変わり果ててしまった姿を恥じて、

浅香山の姿まで映っている山の井が浅いように、そんな浅い気持ちであの人を思っていたのでしょうか。そんなことはありません。

と木に(歌を)書き付けて、自殺してしまつたと、大和物語に記されている。

〔語釈〕

○うどねり 中務省に属す。宮中の警備、雑役、行幸の警護などにあたる職で、四位以下五位以上の子弟で、容姿、才能が優れた者が選ばれた。醍醐天皇以降は、侍を以つて任ぜられた。摂政関白に隨身として賜ることもあり、これを内舍人隨身という。本話も大納言の内舍人隨身。○あさかの郡 福島県安積郡。○あさか山 陸奥(岩代国)の歌枕。安積山とも記す。現在の福島県郡山市日和田安積山公園のあたりとされている。○庵 草や木で作つた粗末な板屋。僧侶や世捨て人の住まい。○けるまに 底本「り」。学・三本の「る」に拠る。○山の井 山中の湧き水が溜まつて自然に出来た井戸。掘り井戸に対して水が浅い。○浅香山かげさへみゆる山の井のあさくは人を思ふものは 浅香山(山の井まで)「浅くは」を導く序詞。「かは」は反語。この歌は、『万葉集』巻一六に異伝歌がある他、『古今集』仮名序、『古今和歌六帖』、『夫木抄』などにも見られる。↓解説参照。○やまともものがたり 平安前期の歌物語。作者未詳。原型の成立は、天曆年間(九四七―九五七)とされている。一七三編の説話から成る。

〔解説〕

「浅香山……」の歌は、早くから『万葉集』巻一六に記され、左注では葛城王の歌として伝承されてきた。

安積山影さへ見ゆる山の井の浅き心を我が思はなくに(三八〇七)

左注によれば、以下の詠歌事情による一首である。葛城王が陸奥国に派遣された時に、その国の国司の接待が非常に無礼であつたので、王に怒りの色が表れる。酒食の宴でもてなしても、王は少しも楽しまない。その時、以前采女

であった風流な娘子が、左手で杯をさして、右手に水（山の井の水）を持ち、王の膝をたたいて詠んだ。すると王の怒りは和らいだという。『万葉集』では、機知に富んだ歌を詠むことによって、王と国司側の関係が修復するという歌徳を称えたものになっている。この『万葉集』の歌は、『古今集』仮名序に「安積山の言葉は、采女の戯れよりよみて」と引かれ、「難波津の歌」と共に「歌の父母」と評されている。

この葛城王は、中世では藤原清輔が『古今集勘物』の書き入れにおいて「葛城大君、左大臣卿也」と注するはじめ、橘諸兄が通説として伝承されていた。

本話の原拠となった『大和物語』一五五段では、下句が「浅くは人を思ふものは」になっており、詠歌事情も『万葉集』とは全く違うものである。一五五段の「浅香山…」の歌は、内舎人が大納言の姫を盗み出し、安積山に住む。男の留守中に、妊娠によって変わり果てた自分の姿を見た女が自殺する時に詠んだもので、説話の内容ともども本話とほぼ同じである。『大和物語』一五五段は、娘（嫁）盗み譚の一つとして位置づけられている。

「浅香山…」の歌にまつわる伝承は、『万葉集』から『大和物語』の間で、既に別の伝承が派生し、二系統に分かれていた。『古今著聞集』の説話は、『大和物語』系統に属する。同系統の話を受け継ぐ『今昔物語集』では、女が懐妊後に入水した後に「然レバ女ハ、従者也トモ、男ニハ心不許マジキ也」と訓戒を述べて、結語としている。しかし、『十訓抄』『古今著聞集』では女の懐妊のことが省かれ、訓戒も前後の配列の関係で仄めかす程度である。

（繩手聖子）

一八二 小野小町が壯衰の事

〔本文〕

小野小町がわかくて色をこのみしとき、もてなしありさまたぐひなかりけり。壯衰記といふ物には、三皇五帝の妃も、漢王・周公の妻も、いまだ此をこりをなさずとかきたり。か、れば、衣には錦繡のたぐひをかさね、食には海陸

の珍をと、のへ、身には蘭麝を薫じ、口には和歌を詠じて、よろづの男をば、いやしくのみ思くたし、女御・后に心をかけたりし程に、十七にて母をうしなひ、十九にて父にをくれ、廿一にて兄にわかれ、廿三にて弟をさきだてしかば、單孤無頼のひとり人に成て、たのむかたなかりき。いみじかりつるさかへ日ごとにおとろへ、花やかなりし貌としくにすたれつ、心をかけたるたぐひもうとくのみなりしかば、家は破て月ばかりむなしくすみ、庭はあれてよもぎのみいたづらにしげし。かくまでに成にければ、文屋康秀が參川掾にてくだりけるに、さそはれて、

わびぬれば身をうきくさのねをたえてさそふ水あらばいなんとぞ思

とよみて、次第におちぶれ行程に、はてには野山にてさそらひける。人間のありさま、これにてもしるべし。

〔現代語訳〕

小野小町が若くて恋愛事を好んでいた頃、(異性に)もてはやされる様子は類を見ないほどであった。『壮衰記』という書物には、「三皇五帝の妃も、漢王・周公の妻も、未だこの(小町のような)驕りをしない」と書かれている。そのような状況であったので、衣装には美しい織物の類を着重ね、食事には山海の珍味を揃え、身体には蘭麝香を薫染め、口からは和歌を詠み出して、多くの男性を、取るに足らないものとはかりに見下し、女御・后に望みをかけているうちに、十七で母親を失い、十九で父親に先立たれ、二十一で兄と死別し、二十三で弟が先立ったので、孤独で寄る辺のないひとりぼっちの身になって、頼る人もいなくなってしまう。たいそうなものであった繁栄ぶりは日ごとに侘しくなり、華やかであった容貌は年々衰えていき、交流のあった者たちも疎遠になるばかりであったので、家屋は壊れて月ばかりが空しく澄むように住みなし、庭園は荒廃して蓬だけがやたらに繁っていた。(小野小町は)このように成り下がってしまったので、文屋康秀が三河の掾になって下向した時に、(三河へ)誘われて、

落ちぶれてしまったこの身は、まるで根を断ち切った浮き草のように辛い境遇なので、誘う水があるのならばどこへでも行きたいと思っています。

と詠んで、次第に落ちぶれていきながら、しまいには野山をさすらったという。人間の様相(というものは、この

逸話からも知ることができるのである。

〔語釈〕

○小野小町 平安時代の歌人。生没年未詳。六歌仙・三十六歌仙の一人。『古今集』「仮名序」には、「をののこまちはいにしへのそとほりひめの流なり、あはれなるやうにてつよからず、いはばよきをうなのなやめる所あるにいたり、つよからぬはをうなのうたなればなるべし」と記される。また出自については、『古今和歌集目録』に「出羽國郡司女。或云。母衣通姫云々」とあり、『袋草紙』上巻に「如_二壯衰形傳_一者、其姓玉造氏也。小野ハ若住所ノ名歟。但或人云、件傳弘法大師所レ作云。小町貞觀之比ノ人也。彼ノ壯衰ハ他人歟」とある。『和歌色葉』には、「小野小町 出羽國郡司女、仁明御宇、承和時人」と記される。○壯衰記 『玉造小町壯衰書』。作者未詳。多くの写本・版本に空海撰と銘記され、空海作者説は根強いが根拠はない。平安中期の成立で、『袋草紙』や『古今集序注』に書名が見え、平安末期には既に流布していたものと考えられる。内容は、路傍を彷徨する老女の悲惨な壯衰の境遇を描いたもので、その主人公は小野小町とは同一人ではないが、後世の小町像の形成に多大な影響を与えてきたと言われる。○三皇五帝王 中国古代の、伝説上の三人の聖なる帝王と聖君五人のこと。諸説あつて、三皇には伏羲・女媧・神農などが挙げられることが多く、また五帝を黄帝・顓頊・帝嚳・帝堯・帝舜などとする。○漢王・周公 漢王は、中国漢の創始者で初代皇帝。廟号は高祖。秦末に項羽とともに秦を滅ぼし、項羽を打倒して天下統一に成功した。周公は、周時代の政治家。文王の子。武王の弟。武王を助けて殷王紂を滅ぼし、内政を治め天下を平定した。○錦繡 錦と刺繡を施した美しい織物。○蘭麝 蘭草（ふじばかま）と麝香の香り。『玉造小町壯衰書』には、「氣香薰馥之貌、不_レ異_二蘭麝散_レ風之匂_一」とある。○文屋康秀 平安時代の歌人。生没年未詳。縫殿助宗子の男。六歌仙・三十六歌仙の一人。『古今集』「仮名序」に、「ふんやのやすひではことばはたくみにてそのさま身におはず、いはばあき人のよききぬきたらむがごとし」と評される。○參川掾 『古今集』雑・九三八の詞書に、「文屋のやすひでみかはそのぞうになりて、あがた見にはえいでたたじやといひやれりける返事によめる」とある。また『古今和歌集目録』の文屋康秀の項には、「貞

観二年三月廿日任「行部中判事」。年月任「三河掾」。元慶元年正月十五日任「山城大掾」。三年五月廿八日任「縫助」。と記される。「掾」は、国庁の三等官。○わびぬれば身をうきくさのねをたえてさそふ水あらばいなんとぞ思 『古今集』雑・九三八、『新撰和歌』恋雑・二四七、『古今和歌六帖』第六・三八三六、『小町集』三八として載る。「憂き」と「浮」は掛詞、また「往なん」には「否」の意を含ませたか。○はてには野山にてさそらひける ↓〔解説〕

〔解説〕

小野小町の晩年については、さまざまな伝承が残されている。古くは『江家次第』に、

或云、在五中将為^レ嫁^二件后^一出家相構、其後為^レ生^レ髮到^二陸奥國^一、向^二八十嶋^一求^二小野小町尸^一、夜宿^二件嶋^一、終夜有^レ聲曰、秋風之吹仁付^二天毛阿那目阿那目^一、後朝求^レ之、髑髏目中有^二野蕨^一、在五中将涕曰、小野止波不成^{ス、キラヒケリ}、薄生計里、

などと記され、『古事談』第二「業平、小野小町の髑髏と連歌する事」には、

奥州八十嶋に宿するの夜、野中に和歌の句を詠ずるの声有り。其の詞に曰く「秋風の吹く般毎^{たびごと}に穴目^{あなめ}穴目」と。音に就きて之を求むるに人無し。只一つの髑髏有り。明旦猶ほ之を見るに、件の髑髏の目の穴より薄生ひ出たり。風吹く毎に薄のなびくおと、此くの如く聞こえけり。奇恠の思ひを成すの間、或る者の云く「小野小町、此のクニに下向し、此の所に於て逝去す。件の髑髏なり」と云々。爰に業平、哀憐を垂れ、下の句を付けて云く「小野とはいはじ薄生ひけり」と云々。件の所を小野と云ひけり。此の事、日本紀式に見ゆ。

と記される。さらに『無名抄』「小野とはいはじの事」にも、

陸奥國に至りてやそしまと云ふ所に宿りたりける夜、野の中に哥の上句を詠ずる聲有り。その詞にいはいく、

秋風の吹くにつけてもあなめ

と云ふ。怪しく覺えて、聲を尋ねつゝ、是を求むるに、さらに人なし。只死人の頭一あり。明くる朝猶これを見るに、彼のどくる「の目の」穴より薄なん一本生ひ出たりける。その薄風に靡く音のかく聞えければ、怪しく覺え

てあたりの人に此事を問ふ。或人語りて云、「小野小町この國に至りて、此所にして命終りにけり。則ち彼の頭是なり」と云ふ。こゝに業平、哀に悲しく覺えければ、涙を抑へて下句付け、り。

小野とはいはじ薄生ひけり

とぞ付けたる。その野をば玉造りの小野といひける」とぞ侍る。玉造りの小町と小野小町と同人かあらぬ者かと、人々おぼつかなきことに申して争ひ侍し時、人の語り侍しなり。

とあるように、小町が陸奥の八十嶋に流れ着きそこで野ざらしの鬮體に成り果てた逸話が、広く伝播したことがうかがえる。これは、前述した『袋草紙』の「彼ノ壯衰ハ他人歟」という一文からも推察できるように、『玉造小町壯衰書』の「徑邊途傍有二一女人一。容貌顛顛カウバセハカシゲ。身躰疲瘦スカタハヤセタリ」と表現される晩年の玉造小町が、小野小町と同一視されたことから生じたものであつたらう。

しかし一方では『八雲御抄』のように、

先年も、古今の歌の殊に心にしむをかきつがふ事有りき。左右をば何となくつがひたりしを、小町ゆめに見えていはく、「われと伊勢とはならびたる女歌よみにて侍りしを、この御歌合に皆、伊勢は左に、これは右につがはれて侍ること、ふかきうれへなり」といふ。夢さめておどろきて、かの巻物をひらきみるに、つがひごとに伊勢は左、小町は右なりけり。左右をさだめざりしことなれば、何となくつがひたるに、自然にかくかけること、今これをみるに且は恐れ、且は随喜す。されば是程の事にも心をとめて照し見けむこと、恐あるによりて、かの巻物すなわち火中に入れ畢。(中略)天性歌のやうことにいみじきうへ、小町をばふかく信仰す。いま又かゝり、勝事とすべし。

と、和歌の達人としての小町を仰ぐ人々も少なくなかつたのである。

片桐洋一『小野小町追跡』(昭和五〇年 笠間書院) 参照

(大江 あい子)

一八三 小式部内侍が大江山の歌の事

〔本文〕

和泉式部、保昌が妻にて丹後にくだりける程に、京に歌合ありけるに、小式部内侍歌よみにとられてよみけるを、定頼の中納言、たはぶれに小式部内侍に、「丹後へつかはしける人はまいりにたるや」といひ入て、局のまへをすぎられけるを、小式部内侍御簾よりなかばいで、直衣の袖をひかへて、

おほえ山いくの、道の遠ければまだふみもみずあまのはしだて

とよみかけり。思はずにあさましくて、「こはいかに」とばかりいひて、返しにも及ばず、袖をひきはなちてにげられにけり。小式部、これより歌よみの世おほえいできにけり。

〔現代語訳〕

和泉式部が、保昌の妻として丹後に下向していた頃に、京で歌合があつたときに、小式部内侍が歌人選ばれて(歌を)詠んだのだが、定頼中納言が、ふざけて小式部内侍に、「丹後へ遣わした人は帰ってきましたか」と言葉をかけて、局の前を通り過ぎたのを、小式部内侍が御簾から半分ほど身を乗り出して、直衣の袖を引きとどめて、

大江山を越えて行く生野の道が遠いので、まだかの天の橋立を踏んでみたこともないし、母からの手紙も届いておりません。

と詠みかけた。思いがけないことに驚いて、「これはどうしたことか」とだけ言って、返歌もできず、袖を振り払ってお逃げになった。小式部は、このときから歌人として世間での評判が立つようになった。

〔語釈〕

○和泉式部 生没年未詳。父は大江雅致、母は平保衡女。和泉守橘道貞と結婚、小式部内侍を産む。夫と別居後、冷泉院の皇子である為尊親王、敦道親王の寵愛をうけるがともに死別。その後、藤原道長の娘である中宮彰子の女房として出仕し、藤原保昌と再婚する。平安中期女流歌人として著名。↓一七四(『フェリス女学院大学文学部紀要』第

四八号、二〇一三年三月)。○保昌 天徳二年(九五八)生、長元九年(一〇三六)没。父は右京大夫藤原致忠、母は醍醐天皇の皇子源元明女。備前・大和・丹後・摂津等の国守を歴任、右馬頭にいたる。藤原道長・頼通に家司として仕えた。和泉式部の最後の夫。↓一七四(同右)。○歌合 いつの歌合のことか明らかではないが、萩谷朴氏は、この歌合を寛仁三、四年(一〇一九、二〇)、治安元―三年(一〇二一―二三)の間に限定されるのではないかと推測する(萩谷朴編著『平安朝歌合大成・第三巻』一九七九年八月)。○小式部内侍 生年未詳、万寿二年(一〇二五)没。父は橘道貞、母は和泉式部。母とともに中宮彰子に仕える。宮中の歌合の歌人選ばれた際に、藤原定頼から母の元に代作を頼む使いをやったかと皮肉られ、即座に「大江山」の歌を詠んでやりこめた本逸話は著名。『無名草子』『十訓抄』『古今著聞集』などに、数々の説話が残っている。↓一七五(同右)。○定頼の中納言 藤原定頼。長徳元年(九九五)生、寛徳二年(一〇四五)没。藤原公任男。母は昭平親王女。中古三十六歌仙のひとり。四条大納言とも呼ばれた。管弦、読経にも秀で、能書家としての名声も高い。『後拾遺集』以下の勅撰集に四六首入集している。小式部内侍の恋人だったとする説もある(『宇治拾遺物語』『古事談』)。○おほえ山いくの、道の遠ければまだふみもみずあまのはしだて「生野」と「行く」を、「文」と「踏み」を掛ける。「踏み」は「橋」の縁語。当時、小式部内侍の歌は母の和泉式部が代作しているという噂があつたが、それを覆すかのごとく当意即妙で切り返した歌。当該歌は、『金葉集』(二度本・雑上・五五〇、三奏本・雑上・五四三)に入集しているが、『金葉集』(二度本、三奏本)では、第四句が「ふみもまだ見ず」とあり、他にも、『俊頼髓脳』で、第二句が「生野のさとの」、第四句が「ふみもまだ見ず」とあり、本文に異同がある。一方で、『百人一首』とは本文に異同がない。小山順子氏は、これらに関連して、中世以降、流布していたのは、「いくのの道の：：まだふみも見ず」の形であったと考えられると指摘している(小山順子「小式部内侍「大江山生野の道の」考―歌枕の機能、解釈、享受」『京都大学国文学論叢』一七、二〇〇七年三月)。

〔解説〕

本説話は、他に、『俊頼髓脳』『金葉集』(二度本・雑上・五五〇、三奏本・雑上・五四三)、『袋草紙』(上)、『無名草

子(女の論)、『十訓抄』(第三・一)などに類話がある。内容的には、ほぼ違いがないが、『俊頼髓脳』『袋草紙』『十訓抄』において顕著なのが、「話末評語」の存在である。以下、各々の該当箇所を掲げてみたい。

『俊頼髓脳』(歌の八病の中に後悔の病という歌病があるため、急いで歌を詠まない方がいいと述べた後の文脈で、小式部内侍の例を挙げ)これを思へば、心疾く詠めるもめでたし。

『袋草紙』 凡得レ名人ハ中々ノ事云出ヨリハ遁避一ノ事也。

『十訓抄』 是はうちまかせて理運の事なれども、彼の卿の心には、これほどの歌ただ今詠み出だすべしとは知られざりけるにや。

このように、小式部内侍の説話は、各々の作品の性格によって、様々な教訓を引き出している。これら教訓の詳細な分類、考察については、菅原利晃氏の論文を参照されたい(菅原利晃「小式部内侍「大江山」歌説話における教訓―「即詠」と「証」としての歌徳説話―」『札幌国語研究』七、二〇〇二年六月)。

(金井由貴子)

一八四 大江匡衡和歌を詠じて和琴を弾ぜざる事

〔本文〕

匡衡卿わか、りける時、藏人にて内裏によるほひありきけるを、さる博士なれば、女房たちあなづりて、御簾のきはよびて、「これひき給へ」とて、和琴を、しいだしたりければ、匡衡よみける、

會坂の關のあなたもまだみねばあづまのことはしられざりけり

女房達返しえせでやみにけり。

〔現代語訳〕

匡衡卿がまだ若かった時、藏人として内裏をよろよろと歩きまわっていたのを、そのような博士であったので、女

房たちが侮って、御簾の傍に呼び寄せて、「これをお弾きなさい」といって、和琴を押し出したところ、匡衡が詠んだ
(歌)

逢坂の関の向こう側をまだ見たことがありませんので、東国のことは知りませんし、吾妻琴も弾けないのです。
女房達は返歌ができずに終わってしまった。

〔語釈〕

○匡衡 諸本「匡房」とするが、『後拾遺集』より「匡衡」と改めた。匡衡は、天曆六年(九五二)生、寛弘九年(一〇二二)七月一六日(一七日とも)没。右京大夫大江重光男。母は一条摂政家女房参河。妻は赤染衛門。子に江侍従、拳周がいる。匡房は曾孫。永祚元年(九八九)文章博士。正四位下、式部大夫に至る。家集に『匡衡集』、詩集に『江吏部集』がある。『後拾遺集』初出。○和琴 六絃の琴。吾妻琴とも。○よろぼひありき 『古本説話集』には「丈高く指肩にて、見苦しかりければ」とある。長身でいかり肩でぱっとしない外見であったという。そういう風体でうろうろしていた様子を言う。○會坂の關のあなたもまだみねばあづまのことはしられざりけり 『後拾遺集』雑二・九三七に「女のもとにまかりたりけるに、あづまをさし出でて侍りければ」の詞書とともに収められている。『匡衡集』にも入集。「あづまのこと」は「吾妻の琴」と「東の事」の掛詞。

〔解説〕

『今昔物語集』巻二四の五二話、『古本説話集』上四、『十訓抄』第三の二に類話が見える。『後拾遺集』では、女たちにかからかってやろうという意図は書かれていないが、『今昔物語集』以後、学問一筋の学者を軽侮してやろうとする女房たちが、逆に当意即妙の和歌に圧倒され、返歌もできなかつたという物語に脚色されている。

(谷知子)

一八五 田舎上りの兵士水上月の秀歌を詠ずる事並びに大宮先生義定が秀歌の事

〔本文〕

伏見修理大夫俊綱家にて、人々水上月といふ事をよみけるに、田舎よりのぼりたる兵士、中門の邊にてこれを聞て、青侍をよびて、「今夜の題をこそつかうまつりて候へ」とて、

水や空そらや水ともみえわかずかよひてすめる秋のよの月

侍、このよしをひろうしければ、大に感じあへり。その夜、これ程の歌なかりけり。同人播磨國へくだりけるに、高砂にて各歌よみけるに、大宮先生義定といふものが歌に、

われのみと思こしかど高砂のおのへの松も又たてりけり

人々感じあへり。良暹其所にありけるが、「女牛に腹つかれぬるかな」といひけり。

〔現代語訳〕

伏見修理大夫(橋)俊綱の邸宅で、人々が「水上月」という事を詠んでいた時に、田舎より上京した武士が、(邸の)中門あたりでこの事を聞いていて、下侍を呼び寄せて、「今夜の題でお詠み申しました」と言つて(詠んだ歌)。

水か空か、空か水かとも見分けがつかない。空と水面に通いあうように、澄み渡っている秋の夜の月。

下侍が、(歌会の人たちに)この歌を披露すると、(人々が)非常に感心した。その夜、これほど(素晴らしい)歌はなかった。同じ人(橋俊綱)が播磨國に下向していた際に、高砂で(人々が)各々和歌を詠んだ時、大宮先生藤原義定という人の歌に、

(むなしく生きながらえているのは)自分だけだと思つてきたけれど、高砂の尾上の松も(枯れもしないで)また立っているのだった。

人々は一同感心した。良暹がその場にいたが、(思いがけなくも)牝牛に腹を突かれたようなものだ」と言つたといふ。

【語釈】

○伏見修理大夫俊綱 長元元年(一〇二八)生、嘉保元年(一〇九四)没。関白藤原頼通の子、讃岐守橘俊遠の養子。「伏見修理大夫」(『尊卑分脈』)と呼ばれていた。『今鏡』には俊綱の伝記が書かれている。伏見の壮大な邸宅に、しばしば歌会が催されたという。また、白河天皇の問いに、伏見の邸宅を、石田、高陽院に続く風流の所と称したエピソードが伝わっている(『今鏡』伏見の雪の朝)。○水上月 「水清み宿れる秋の月さへや千代まで清くすまんとすらん」(『源順集』二四八・水上月)「思ひかね都のかたを眺むればさびしき月ぞ水に映れる」(『定頼集』八六・水上月)など、水上月という歌題の歌は多く見える。○青侍 身分の低い若侍。『書言字考節用集』では「堂上家斥布衣以下侍。曰青侍」とある。○水や空そらや水ともみえわかずかよひてすめる秋のよの月 「すむ」は「澄む」と「住む」の掛詞。「澄む」は「水」「空」「月」の縁語。この歌は、『続詞花集』に、「題しらず よみ人も」(秋・一八四)、『新後拾遺集』に「水上月を よみ人しらず」(秋・三七二)として入る。○同人播磨國へくだりける 俊綱が播磨守に任ぜられたことは、「播磨守俊綱のもとにわたりて」(『経信集』五八)「山辺のけしき変はりて侍らむかしとて、はりまのかみとしつな」(『経衡集』一一二)の歌の詞書に確認できる。俊綱の在任期間について、直鍋熙子氏は、治暦二年(一〇六六)から延久二年(一〇七〇)まで、あるいは重任して延久五年(一〇七三)までと推定している。一方、安田純生氏は康平七年(一〇六三)に任期を遡ることができるという。真鍋熙子「橘俊綱考―その一、伝記をめぐって―」(『平安文学研究』第二五輯、一九六〇年一月)、安田純生「良暹法師について」(『樟蔭国文学』第一五号、一九七七年一〇月)参照。○高砂 播磨国の歌枕。現在の兵庫県高砂市。高砂神社の相生の松で有名。○大宮先生義定 「大宮」は住所の地名か。「先生」は東宮坊の帯刀の長官である。義定は、のりさだともいい、「六位。藤原定通男」(『勅撰作者部類』)とあるが、定通男で帯刀の長官に任ぜられた者がいないので、義定はかならず明確な人物ではない。義定の歌は、「われのみと」(雑・九八五)の一首が『後拾遺集』に見え、ほかの歌が見当たらない。○われのみと思こしかど高砂のおへの松も又たてりけり この歌は、『後拾遺集』に、「身のいたづらになりはてぬることを思ひ嘆きて播磨にたびた

び通ひ侍けるに、高砂の松を見て」(雑・九八五・藤原義定)として入る。『和歌初学抄』には、「たかさごの松」に「播磨、いたづらなるものにそふ」とあり、高砂の松にいたずらに過ぎた歲月のイメージが付くという。新大系の注釈では、この歌を「老いた官人が有名な老松を友と見て自身を慰めている歌」として捉える。「高砂の松」は老後の孤独の友として詠まれる歌は、「誰をかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに」(『古今集』雑・九〇九・興風)、「いたづらに世にふるものと高砂の松も我をや友と見るらん」(『貫之集』八九七)などが見える。○良暹 生没年未詳。後朱雀・後冷泉兩朝頃の人。比叡山の僧で祇園別当となった。橘俊綱歌会に参加し、賀茂成助、津守国基、橘為仲などと親しく交流する。私撰集『良暹打聞』と家集が散逸。良暹のことは、上野理『後拾遺集前後』(笠間書院、一九七六年)、安田純生「良暹法師について」(前掲)に詳しい。○女牛に腹つかれぬる (ふだんおとなしい牝牛に、思いがけなくも腹を突かれるという意から) 甘く見ていた相手に不意打ちされて痛い目にあわされるたとえ。この場合は、玄人が素人に詠み負かされたことをいう。『古今著聞集』巻一二「博打」の右大臣忠経の侍の話にもこの譬えが見える。

〔解説〕

田舎上りの武士が秀歌を詠んだ話は『袋草紙』(雑談)、『十訓抄』(三ノ四)、『沙石集』(巻五末ノ二)にも見える。『袋草紙』と『十訓抄』は『古今著聞集』とはほぼ同文であるが、秀歌を聞いた歌会の人たちの反応に相違がある。『袋草紙』には「感且恥テ各退出^{云々}」、「『十訓抄』には「恥あへりけり」と、恥を重んじる表現で描かれている。一方、『沙石集』には本文の異同が大きく見られ、秀歌を詠んだ田舎の人夫が俊綱の懸賞にあたって夫役から解放された話となっている。

なお、義定が秀歌を詠んだ話は、『袋草紙』(雑談)、『十訓抄』(三ノ四)にも見えるが、『沙石集』には記述がない。

(蔡雅如)

一八六 物乞の法師琴弾く女に應へて詠歌の事

〔本文〕

或人の家に入て、物こひける法師に、女の琴引て居たるが、「此ねを、けふの布施にて歸りね」といひければよめる、

こと、いはゞあるじながらもえてしがなねはしらねどもひき心みん

此乞者は三形の沙彌なりと、或人いひけり。

〔現代語訳〕

ある人の家に入って、物乞いをしていた法師に、女で琴を弾いていたのが、「この音を、今日の布施にして帰ってください」と言ったので詠んだ（歌）、

（布施を）琴にすると言うならばその持ち主も一緒に手に入れたいものだ、琴の音色も共寝も知らないが、琴を弾き試みて、あなたのお気持ちも引いてみたい。

この乞者は三形の沙彌であると、ある人は言った。

〔語釈〕

○布施 仏や僧に施す金品や品物。○こと、いはゞあるじながらもえてしがなねはしらねどもひき心みん 「ね」に音と寝、「ひき」に弾きと引きを掛ける。「ね（音）」「ひき（弾き）」は「琴」の縁語。同じ縁語の例に「琴の音や松ふく風にかよふらん千代のためしに引きつべきかな」（金葉集二奏本・雑上・五四一・撰津）がある。○乞者 托鉢・乞食をする僧侶。○三形の沙彌 『万葉集』に見える三形（方）沙彌をさすか。沙彌は出家したばかりの修行未熟な見習い僧。『万葉集』の三形沙彌については、『日本書紀』持統紀六年一〇月の条の山田史御形と同一人物とする説、三方氏の沙彌という名の人物とする説がある。前者については、川上富吉「三方沙弥伝考―還俗官僚の文学伝記―」（『上代文学』第三四号、一九七四年四月）に詳しい。『万葉集』巻二・一二三〜一二五では、三形沙彌と新妻・園臣生羽女との間で、

女の黒髪を介した官能的な歌のやり取りがされている。

〔解説〕

三形沙弥と琴を弾く女の説話は、『古今著聞集』以外に『袋草紙』『十訓抄』に見られる。僧侶が女の言葉に応えて求愛の歌を詠むという同話型のもは、『古今著聞集』巻八・好色「道命阿闍梨歌を以て和泉式部に答ふる事」などがある。

(繩手聖子)

一八七 阿闍梨仁俊北野社に祈りて詠歌し感應ある事

〔本文〕

中納言通俊卿子に、世尊寺阿闍梨仁俊とて、顯密知法にてたうとき人をはしけり。鳥羽院にさぶらひける女房、仁俊は女心あるものの、そらひじりたつるなど申けるを、阿闍梨かへりき、て口惜く思て、北野に參籠して、「此恥す、ぎ給へ」とて、

あはれとも神くならば思しれ人こそ人のみちをたつとも

とよみたりければ、かの女房あかきはかまばかりをきて、手に錫杖をもちて、「仁俊にそらごとひつけたるむくひよ」とて、院の御前にまいりて舞くるひければ、あさましとおぼしめして、北野より仁俊をめし出して見せられければ、神恩のあらたなる事に涙をながして、一たび慈救呪をみてければ、女房もとの心地になりけり。院いみじくおぼしめして、うすゞみといふ御馬をたびてけり。

〔現代語訳〕

中納言通俊卿の子に、世尊寺阿闍梨仁俊とって、顯教密教によく精通した高德の人がおいでになった。鳥羽院にお仕えしていた女房が、仁俊は女に関心があるのに、えせ聖であるなどと言っていたのを阿闍梨が噂に聞いて無念に

思つて、北野天満宮に参籠して、「この恥を雪いでください」と願ひ上げて、

氣の毒にと、北野の神が誠の神ならば、ご同情くださるでしょう。他人が私の生きる道を絶つたとしても。

と詠んだところ、あの女房が赤い袴だけを着け、手に錫杖を持って、「仁俊に作り事を言いふらした報いであるよ」と言つて、(鳥羽)院の御前に参内して舞い狂つたので、(院は)驚かれて、北野天満宮から仁俊を呼び出されて(これを)お見せになると、(仁俊は)神の靈験があらたかであることに(感激して)涙を流して、一たび慈救呪が満願となると、女房は我に返つた。院は見事であると感動されて、うすずみという御馬を(仁俊に)下賜されたという。

〔語釈〕

○中納言通俊 藤原通俊。永承二年(一〇四七)生、康和元年(一〇九九)没。平安後期の歌人。従三位大宰大式経平男。権大納言藤原信家の猶子。母は高階成順女。納言弁官を歴任。嘉保三年(一〇九六)に従二位中納言兼治部卿に至る。青壮年期、白河天皇側近の賢臣として大江匡房と並称された。歌人としては、多くの歌合で詠進、白河天皇の大井川行幸和歌にも従つた。承保二年(一〇七五)には『後拾遺集』を撰集、寛治元年には目録を添えた再奏本を完成した。○世尊寺阿闍梨仁俊 通俊の四男。生没年未詳。世尊寺は、藤原行成が一条大宮の西北桃園に創設した寺で、本尊は大日如来。○顯密知法 顯教と密教との修法の事相に精通すること。顯教は釈尊の説いた教えであり、密教は大日如来の説いたとされる秘密の教え。○北野 北野天満宮。一七七「小大進歌に抛りて北野の神助を蒙る事」にも記されるように、同宮にはかかった嫌疑を晴らしてくれらるご利益があると信じられていた。○あはれとも神くならば思しれ人こそ人のみちをたつとも 『統後拾遺集』神祇歌・一三四三に、「鳥羽院御時、なき事を女にいひつけられて侍りける比、北野社にこもりてよめる 仁俊法師」として、「あはれとは神かみならば思ふらん人こそ人をなきになすとも」という一首が見える。○慈救呪 仏語。不動明王の大・中・小、三呪文の一つ中呪のこと。これを唱えらると、災害を免れ願ひが叶うと言われる。○みてければ 満願となること。

○神恩のあらたなる事 この逸話は、『北野天神縁起』や『十訓抄』にほぼ同話が見える。

(大江あい子)

一八八 天曆の月次御屏風の歌に兼盛擣衣を詠じ紀時文是を難する事

〔本文〕

天曆御時、月次御屏風の歌に、擣衣の所に兼盛詠て云、

秋深き雲井の鴈のこゑすなり衣うつべきときやきぬらん

紀時文、件色紙形をかくとき、筆をおさへていはく、「衣うつをみてうつべき時やきぬらんと詠ずる如何」。兼盛にやがてたづねらるゝ處に、申していはく、「貫之が延喜御時、同御屏風に駒迎の所に、

會坂の關の清水に影みえていまやひくらむもち月の駒

と詠ず。此難ありや如何」。時文口をとづ。しかも時文は貫之が子にて、かくなんそしりける、いよくあさかりけり。

〔現代語訳〕

村上天皇の御代、月次御屏風の歌で、擣衣のところに兼盛が詠んでいることには、

秋が深くなり空高くから雁の声が聞こえてくるようだ。衣を打つ時期が来たのであろうか。

紀時文が、この色紙形を書くとき、筆をとめて言うことには、「衣を打つ(絵)を見て衣を打つ時期が来たのであろうかと詠ずるのはいかがなものでしょうか」。兼盛にただちに尋ねられたところ、(兼盛が)申していることには、「貫之が醍醐天皇の御代に、同じ(月次)屏風で駒迎の(絵が描いてある)所に、

満月の影が映る逢坂の関の清水に姿を見せて、今まさに牽いていることだろうか、望月の駒を。

と詠じています。仰るような難点がありますか、どうでしょうか」。時文は黙ってしまった。しかも時文は貫之の子であって、このように非難したということは、ますます浅はかなことであった。

〔語釈〕

○天曆御時 村上天皇の治世。九四七〜九五七年。○月次御屏風 各月ごとに年中行事の絵柄を描き分け、それにちなんだ詩歌を色紙に書いて貼ったり、書き入れた屏風。○擣衣 衣を柔らかくするために砧で衣を打つこと。○兼盛平。生年未詳、正暦元年(九九〇)没。光孝天皇の曾孫にあたる大宰大式篤行王男。母は宮道氏。三十六歌仙の一人。『拾遺集』以下の勅撰集に八三首が入集。「天徳内裏歌合」における壬生忠見との対決は著名で、この時に詠んだ歌「しのぶれど色にでにけりわが恋はものや思ふと人のとふまで」が『百人一首』に採られている。○秋深き雲井の鴈のこゑすなり衣うつべきときやきぬらん 「こゑすなり」の「なり」は推定の助動詞。「らん」は推量を表わす。『兼盛集』にこの歌は見えない。○紀時文 生没年未詳。紀貫之男。母は藤原滋望女。『後撰集』選者で、梨壺の五人の一人。勅撰集には、『拾遺集』以下に五首が入集している。○色紙形 屏風、障子などに色紙の形を描いて彩色を施して、詩、歌、文などを書いたもの。一六四(『フェリス女学院大学文学部紀要』第四八号、二〇一三年三月)にも見える。○たづねらる 底本「ね」なし。学・三本により補う。○貫之 紀。生年未詳、天慶八年(九四五)没。紀望行男。三十六歌仙の一人。『古今集』に一〇二首、以下歴代の勅撰集に合計四五二首が入集している。『古今集』撰者の中心的人物で「仮名序」の作者。また、旅中の体験を『土佐日記』に記し、日記文学の先駆をなした。○延喜御時 醍醐天皇の治世。九〇一〜九二三年。○駒迎 駒牽の時、諸国から貢進される馬を馬寮の使いが、逢坂の関まで迎えに出る儀式。毎年八月中旬に行なわれた。○會坂の關の清水に影みえていまやひくらむもち月の駒 『拾遺集』(秋・一七〇)に「延喜御時月次御屏風に」の詞書きとともに貫之歌として入集する。「もち月の駒」は望月(現長野県佐久市)の牧の駒。その駒牽きは八月二三日に行われた。当該歌も兼盛歌同様、推量の「らむ」を用いているが、水に映った姿を詠じ凝った趣向となっている。○いよく 底本「と」。学・三本の「よ」に従う。○あさかりけり 底本「れ」。学・三本の「り」に従う。説話の編者である橘成季が、歌の趣向性について理解していなかったため、親の七光り的な面みにスポットをあてた説話となっているのではないだろうか。

〔解説〕

本説話は、『袋草紙』(上)、『拾遺抄註』『十訓抄』(第四・一一)に類話が見える。内容的には、ほぼ相違点は見られないが、顕昭の『拾遺抄註』では、末尾に「是ハ故六条ノ左京兆所談也」とあり、この話が顕輔からの伝聞であることが記されている。

(金井由貴子)

一八九 崇徳院百首歌に同じ五文字を詠む詠まざる旨を左京大夫顯輔に問給ふ事

〔本文〕

左京大夫顯輔、新院にまいりたりけるに、「百首よむやうはならひたるか」と仰ごとありければ、「ならひたる事候はず。顯季もおしへず候」と申ければ、「まことにや、百首にはおなじ五字の句をば、よまざるなるは」とはせ給ければ、顯輔、「いかゞ候らん、百首までよむものにて候へば、よみもやし候らん」と申ければ、「公行がよまぬよしを申也」と仰ごとありければ、顯輔かへり、堀川院の御百首をひきてみるに、春宮大夫公實卿歌に、薄・刈萱の兩題に、秋風といふ第一句さしならびてありければ、兩首をたたうがみにかきて、九月十三夜の御會に持てまいり、公行卿に、「これ御らん候へ」といひたりければ、閉口せられにけり。公行は公實の孫なり。用意あるべきことにや。

〔現代語訳〕

左京大夫顯輔が新院(崇徳院)の御所に参上した折に、「百首の詠み方は習ったか」とお尋ねがあったので、「習ったことはございません。(父)顯季も教えてくれませんでした」と申し上げると、「本当か、百首歌には同じ五文字の句を詠まないというが」とお尋ねになると、顯輔は「さあ、どうでしょうか、百首まで詠むものでございますから、(同じ句を)詠むこともあるのではないのでしょうか」と申し上げると、「公行が詠まないものだ」と申すのだ」と仰るので、顯輔が帰宅して、堀川院御百首を繙いてみると、春宮大夫公實卿の歌に、薄・刈萱の兩題に、秋風という第一句

が並んでいたもので、両首を疊紙に書いて、九月十三夜の御会に持って参り、公行卿に、「これを御覧なさい」と言ったら、(公行は) 閉口なされた。公行は公実の孫である。心配りをしておくべきことではないだろうか。

〔語釈〕

○左京大夫顯輔 寛治四年(一〇九〇)生、久寿二年(一一五五)没。藤原顯季男。母は、藤原経平女。正三位左京大夫に至る。仁平元年(一一五一)崇徳院の下命を受けて、『詞花集』を奏上する。「久安百首」の作者。家集に『顯輔集』。『金葉集』初出。○新院 崇徳院。元永二年(一一七七)生、長寛二年(一一六四)八月二十六日崩。鳥羽天皇第一皇子。母は待賢門院璋子。第七五代天皇。保元の乱に敗れ、讃岐国に流され、同地にて崩じた。『詞花集』の下命者。「久安百首」を主催した。『詞花集』初出。○顯季 天喜三年(一一五五)生、保安四年(一一二三)九月六日没。美濃守隆経男。母は藤原親国女で、後白河院乳母従二位親子。実季の養子となる。正三位に至る。六条家の祖。人麿影供を最初に行った。家集に『顯季集』。『後拾遺集』初出。○百首 百首歌のこと。○公行 長治二年(一一〇五)生、久安四年(一一四八)六月二二日没。八条太政大臣実行男。母は藤原顯季女。従三位右兵衛督に至る。『詞花集』初出。○堀川院の御百首 長治二年(一一〇五)一二月から同三年三月の間に成立、堀河院に奏覧。発企者は、俊頼説・公実説の二説がある。奏覧本は一二人の作者の歌を集成したもの。基本的な組題百首として、以後長きにわたって尊重され、規範となった。○春宮大夫公實卿 天喜元年(一一五三)生、嘉承二年(一一〇七)十一月四日没。後閑院大納言実季男。母は大宰大貳藤原経平女。正二位権大納言に至る。和歌に熱心で、作歌態度を範永から誉められた逸話が『袋草紙』上巻に載る。「堀河百首」などの作者。『後拾遺集』初出。○薄・刈萱の兩題に、秋風といふ第一句さしならびてありければ「薄」題の一首目「秋風にはらむ薄のある野辺はうつしの露や色にまがへる」と「刈萱」題の一首目「秋風になびくほどなき刈萱は下葉を上を吹き乱るかな」で、第一句が全く同じであることをいう。○九月十三夜の御會 八月十五夜の会に並んで、「後の月見」として盛んに月見の会、歌会が開かれた。

〔解説〕

『十訓抄』第四が初出と思しい。『古今著聞集』とほぼ同話である。

(谷知子)

一九〇 花園左大臣家の侍が青柳の歌の事並びに紀友則が初雁の歌の事

〔本文〕

花園左大臣家に、はじめてまいりたりける侍の、名簿のはしがきに、能は歌よみと書たりけり。おとゞ、秋のはじめに南殿に出て、はたをりのなくを愛しておはしましけるに、くれければ、「下格子に人まいれ」と仰られけるに、「藏人五位たがひて、人も候はぬ」と申て、この侍まいりたるに、「たゞ、さらば汝おろせ」と仰られければ、まいりたるに、「汝は歌よみな」とありければ、かしこまりて御格子おろしさして候に、「このはたをりをばきくや。一首つかうまつれ」とおほせられければ、「あをやぎの」と、はじめの句を申出したるを、さぶらひける女房達、おりにあはずと思たりげにて、わらひ出したりければ、「物をき、はずしてわらふやうある」と仰られて、「とくつかふまつれ」とありければ、

青柳のみどりのいとをくりをきて夏へて秋ははたをりぞなく

とよみたりければ、おとゞ感じ給て、萩をりたる御ひたゝれを、をしいだしてたまはせけり。寛平歌合に、はつ鴈を、友則、

春霞かすみていにしかりがねは今ぞなくなる秋霧の上に

とよめる、左方にてありけるに、五文字を詠たりける時、右方の人、こゑぐにわらひけり。さて次句に、霞ていにしといひけるにこそ音もせず成にけれ。おなじ事にや。

〔現代語訳〕

花園左大臣（源有仁）家に、初めて参上した侍の、名簿の端に、能は歌詠みと書いていた。大臣が、秋のはじめに南殿に出て、機織虫の鳴くのを愛でていらつしやた時に、（日が）暮れたため、「格子をおろしに誰か参れ」とお命じになったところ、（誰かが）「藏人五位が居合わせず、人もおりません」と申して、この侍が仕えているため、「まあ、それならお前がおろせ」とおっしゃったと、（侍）が参上しているところに、「お前は歌詠みだったな」とおっしゃったので、御格子をおろしかけたままでもかしまっている、（大臣が）「この機織虫が聞こえるか、一首詠み給え」と仰せられたので、「青柳の」と、初句を申し出したのを、（側に）仕えていた女房達、季節に合わずと思つた様子で、笑い出したため、（大臣は）「物を最後まで聞かないで笑うことがあるか」と仰せられ、「早く詠み給え」とおっしゃったので、（侍は、）

（春は）青柳の緑の糸を手繰っておいて、夏をへて機に糸を延ばしてかけて、秋は機を織るかのように、機織虫が鳴くのだ。

と詠むと、大臣は感心なさって、萩（の模様）を織り出した直垂を、（御簾の下から）押し出して賞賜くださった。寛平歌合に、「初雁」を、友則が、

春霞の中に霞んで（姿が見えなくなつて）飛び去っていた雁が、今は秋霧の上に鳴き声が聞こえる。

と詠んだ。（友則が）左方であった時、（最初の）五文字を詠んだところ、右方の人、それぞれ笑つたという。そして次の句に、「霞ていにし」と言つた時に音もしなくなつてしまった。（侍の歌と）同じ事であるう。

〔語釈〕

○花園左大臣 康和五年（一一〇三）生、久安三年（一一四七）没。後三条天皇の三宮輔仁親王男→一七二参照（『フエリス女学院大学文学部紀要』四八、二〇一三年三月）。○名簿 自分の官職と姓名などを書き付けた名札。新しく家人になる時、貴人との対面の折りなどに差し出した。「名付き」とも。○はたをり きりぎりすの古名。秋の景物。○

下格子 格子をおろすこと。○蔵人五位 極臈(就職順で決められた六位蔵人の首席)は巡爵といって六年勤務すると五位に叙されるが、この際、普通五位蔵人に転じることなく、蔵人を辞職し地下人になる。こういう人を「蔵人五位」と呼んだ。○おりにあはず 青柳は春の景物、秋のはじめの時節に似つかわしくない。○青柳のみどりのいとをくりをきて夏へて秋ははたをりぞなく 第三句、『十訓抄』は「くりかへし」。「糸」が「機」の縁語。「へて」に「経て」と「綜て」を掛ける。「綜(ふ)」は縦糸を機に掛けたり引きそろえたりするの意。「綜」の用例は「白露を玉にぬくやとささがにの花にも葉にもいとをみな綜し」(『古今集』物名・四三七・をみなへし・紀友則)がある。○はつ鴈 秋に、その年初めて北方から渡ってくる雁。よく見える題。「初雁のこゑにつけてや久方の空の秋をも人の知るらん」(『貫之集』四八六・同じ年(天慶四年)三月内裏の御屏風の料の歌廿八首・初雁をきける)などの歌が見える。○友則 紀。生没年未詳。平安前期の歌人。紀貫之の従兄。三十六歌仙の一人。延喜四年(九〇四)大内記。『寛平御時后宮歌合』などの歌合に出詠し、醍醐天皇の命をうけて『古今集』の撰者の一人となった。家集に『友則集』がある。

○春霞かすみていにしかりがねは今ぞなくなる秋霧の上に 雁は秋に北方から渡ってきて、春に帰る鳥である。秋に渡ってくる雁を「初雁」という。「初雁」の題で、春霞を詠み込まれるのが季節はずれなので、友則が笑われた。この歌にそれぞれ異伝があり、萩谷朴氏の「寛平御時歌合 雑載」(『新訂増補平安朝歌合大成』同朋舎、一九九五年)に詳しい。『古今集』では「題しらず よみ人しらず」(秋・二二〇)、『古今六帖』では「かり 人丸」(巻六)、『公忠集』では「朱雀院御時八月十五夜をもてあそぶ心」(一一)、『袋草紙』では「躬恒」(巻上・雑談)、『十訓抄』では「寛平歌合に初雁を 友則」(四ノ十五)、『西行上人談抄』では「貫之中宮の御屏風に書きけるを」として、それぞれ所載と作者異伝がある。『俊頼髓脳』では、「思ひかけぬふしある歌」(意外な趣向を持つ歌)として評している。○おなじ事によ 初句で意外な季節を提示し、いくつもの季節を詠み込んで一首を括るのが歌の趣向である点は、「青柳」の歌と同様である。『十訓抄』では、この句なし。そのかわりに、「ものを聞きもはず、ひたさわぎに笑ふこと、あるまじきことなり……」などの教訓が続いた。「またさやうに思ひがけぬことも、よむまじきにや」とあり、こういう歌詠みぶ

りが望ましいかと疑問を呈している。

〔解説〕

この段の侍と友則の説話は『十訓抄』にも見え、目立った異文がない。『十訓抄』と『古今著聞集』の友則の説話は、『袋草紙』の引用した『朗詠江記』（現存しない。『袋草紙』によつてのみ存在が知られる）の躬恒説話から発展したものと考えられている（『袋草紙注釈』「六八 補説」（塙書房、一九七四年）、新全集『十訓抄』「四ノ十五」頭注）。『袋草紙』の本文を引用しておく。

朗詠集江記云、春霞ミテイニシ雁金ハ、注云、或人云、躬恒、于時八月也、滝口戸參、祇候竹台下時、秋雁適鳴。有勅命猷和歌。三反唱春霞字。人々嘲哂。爰躬恒於滝口戸称曰、到佳境云々。次読之、人々感。今案、古集為化。
（他イ）歌可召云々。
（『袋草紙』上・雑談）

また、『十訓抄』と『古今著聞集』の友則にまつわる歌合の説話について、萩谷朴氏は、『古今集』がこれほど有名な歌合の歌を「題しらず よみ人しらず」としたとは考えにくいから、この歌合の話は史実ではなく、説話者流の創作であるかもしれないという。なお、両書にいう「寛平歌合」のことについて、萩谷朴氏は、保安二年九月内大臣歌合に判者俊頼が言う寛平九年歌合を指す可能性を指摘している（「寛平御時歌合 雑載」、『新訂増補平安朝歌合大成』同朋舎、一九九五年）。

（蔡 雅如）

一九一 四条大納言公任三月盡夜に長能が歌を難ずる事

〔本文〕

公任卿家にて三月盡の夜、人ぐあつめて、くれぬる春をおしむ心の歌よみけるに、長能、
心うき年にもあるかなはつかあまりこ、ぬかといふに春の暮ぬる

大納言うちきゝて思もあへず、「春は卅日やはある」といはれたりけるをきゝて、長能披講をもきゝはてずいでにけり。扱又のとし病をして限也と聞て、とぶらひに人をつかはしたりければ、悦て、「うけたまはり候ぬ。この病は去年の三月盡に、春は卅日やはあると仰られしに、心うきことかなと承しに、病に成て、其後いかにも物くはれ侍らざりしより、かくまかりなりて侍也」と申し。さて又の日うせにけり。大納言ことのほかになげかれけり。これはさうなく難ぜられたりける故にや。

〔現代語訳〕

公任卿の家で三月尽の夜、人々を集めて、暮れ行く春を惜しむ心の歌を詠んだ時に、長能（が詠んだ歌）、

（今年は）辛い年だなあ、二〇日あまり九日（二九日）だというのに春が終わってしまうとは

大納言が（この歌を）ちよつと聞いて深く考えずに、「春は三〇日だけだろうか」とおっしゃったのを聞いて、長能は披講さえも聞かずに退出した。さて次の年（長能は）病になり最期であると聞いて、（公任は）見舞いに人を遣わした所、（長能は）喜んで、「（お見舞いを）お受けいたします。この病は去年の三月の終わりに、春は三〇日だけだろうか」と仰られた時に、嘆かわしいことだと思っておりました所に、病になって、その後どうしても食べ物を受け付けることが出来なくなってしまうので、このようになってしまいました」と申し上げた。そうして次の日に亡くなった。大納言は殊の外お嘆きになったそうだ。これは不用意に（長能の歌を）非難なされたのが原因だろうか。

〔語釈〕

○四条大納言公任 藤原公任。康保三年（九六六）生、長久二年（一〇四二）正月一日没。平安中期の歌人、歌学者。詩歌・管弦をはじめ、諸道の才人として知られた。通称は四条大納言。父は関白太政大臣の藤原頼忠、母は中務卿代明親王女、巖子女王。一六八（『フェリス女学院大学文学部紀要』第四八号、二〇一三年三月）参照。○三月盡 陰暦三月の終わり、春の尽きる日。○くれぬる春をおしむ心 「三月盡」の情趣を和語化したもの。歌題としての「三月盡」の題意は、惜春の心を尽すことにある。三月末日で暦上の春が終わり、王朝貴族にとっては凌ぎにくい夏が来る

ので、惜春の情は切実で強かった。「三月尽」を詠んだ例に「残りなく暮れぬる春を惜しむままに心をさへも尽くしつるかな」(『金葉集』三奏本・春・九四・源雅兼) などがある。○長能 藤原長能。生没年未詳(生年は天曆三年(九四九)か)。父は藤原倫寧。母は形部大輔源認女。『蜻蛉日記』作者(道綱母)の弟。中古三十六歌仙の一人で、能因の和歌の師匠で、歌道上の師弟関係の先蹤となった(『袋草紙』雑談)。歌集に『長能集』がある。○心うき年にもあるかなはつかあまりこゝぬかといふに春の暮ぬる たまたまこの年の三月は小月(陰暦で一ヶ月が二九日の月)だったので、こう詠んだ。○披講 歌会で和歌を読み上げること。○春は卅日やはある 春は三ヶ月あるのに長能が一日少ない小の月にこだわって嘆くのを、公任が揶揄した。○扱又とぶらひに この箇所、底本になし。三本および『十訓抄』により補う。○うけたまはり候ぬ 底本「うけ」なし。学・三本により補う。○病に成て、其後いかにも物くはれ侍らざりしより、かくまかりなりて侍也 歌道に執着して命を落とした代表的な歌人として、天徳内裏歌合で平兼盛に負けて、不食病になり亡くなった壬生忠見がいる。

〔解説〕

三月尽に、長能が「心うき年の…」の歌を詠む話は、本話以外にも広く流布しており、『袋草紙』『古本説話集』『十訓抄』『俊頼髓脳』『沙石集』などにも見られる。

一、詠歌場所の違い

長能説話の早い例として『俊頼髓脳』『袋草紙』がある。

①これは、四条大納言の家にて、三月尽の夜、人々あつめて、暮れぬる春を惜しむ心を詠みけるに、長能が詠める歌なり。
(『俊頼髓脳』)

②長能花山院において三月尽の歌を詠みて云はく

(『袋草紙』上巻)

①の詠歌場所は、『古今著聞集』と同じく四條大納言(公任)邸であるのに、②では花山院に変わっている。『長能集』はこの歌について、

花山院に、三月小なりし時、春の暮れ惜しむ心人々よみしに

(神宮文庫本・群書類従本)

三月、廿九日にてはて侍けるとし、春立つ心、人々よみ侍りけるに、花山院にて

(桂宮本)

と詞書があるから、本来は花山院での詠歌であろう。清輔は、『俊頼髓脳』とは別の情報を踏まえて、『袋草紙』の記事を訂正したのだろう。だが、『袋草紙』で詠歌場所を訂正されたにも関わらず、以後の長能説話は全て『俊頼髓脳』の四條大納言家説を引き継いでいる。『古今著聞集』も、『俊頼髓脳』系の伝承の流れを受けている。

二、説話と史実の違い

『古今著聞集』では「心うき…」の歌が長能の死因になったとされているが、花山院崩御の翌年(一〇〇九年)に任伊賀守の事実があるなど、生存が明らかであるから史実とは違う。

三、各説話の末尾の違い

数多くある長能説話は、話の大筋は変わらないが、末尾文が各説話で異なっている。

①「さばかり心に入りたりしことを、よしなく言ひて」と、後まで大納言はいみじく嘆き給ひけり。あはれにすきずきしかりける事どもかな。
(『古本説話集』長能・道濟事・上二六話)

②大納言大に歎思せらると云々。執する人の事、荒涼に難ずべからざるか。
(『袋草紙』上)

③大納言、ことのほかに嘆かれけりとぞ、承りし。されば、かばかり思ふばかりの人の歌などは、おぼつかなき事

ありとも、難ずまじき料にしるし申すなり。

〔俊頼髓脳〕

④これは「かくほどあるべし」とは思ひ給はざりけれども、さばかりおもんばかりある身にて、なにとなく、口疾く難ぜられたりける、いと不便なりしか。

〔十訓抄〕四ノ一七

①②③は、それぞれ長能の執道への感動と悲哀を記しているが、④の『十訓抄』は、公任が余計な一言を言ったと非難している。これらの違いについては、池上洵一「長能説話の文脈―十日あまり九日といふに春の暮れぬる」(『古代中世和歌文学の研究』第一九号、二〇〇三年二月)は、『十訓抄』四の余計な一言のために人が迷惑し、自身も被害を受けた例話が次々と開示されているという配列の関係から、『十訓抄』は多言への訓戒という論理に従って、長能説話を意図的に改変していると指摘している。

(繩手聖子)

一九三 後鳥羽院御時俊成和歌を奏して定家勅勘を免ぜらるる事

〔本文〕

後鳥羽院御時、定家卿殿上人にておはしける時、いかなる事にか勅勘によりて、こもりゐられたりけるが、あからさまと思けるに、其年もむなしく暮にければ、父俊成卿この事をなげきて、かくよみつ、職事につけたりけり。

あしたづの雲るにまよふ歳くれて霞をさへやへだてはつべき

職事、此歌を奏聞せられければ、御感ありて、定長朝臣に仰てぞ御返事ありける、

あしたづは雲井をさして歸なりけふおほ空のはる、けしきにやがて殿上の出仕ゆりられにけり。

〔現代語訳〕

後鳥羽院の御代、定家卿が殿上人としておられた時、どのような事か天皇のおとがめによって、籠って（謹慎して）おられたが、わずかな間のことと思っていたのに、その年もむなしく暮れてしまったので、父俊成卿はこの事を嘆いて、このように詠んで蔵人に取り次ぎを頼んだ。

鶴が雲の中で迷ったまま年が暮れてしまいました。このうえ（春）霞まですっかり隔ててしまうのでしょうか。蔵人が、この歌を（後白河院に）奏上されたところ、感動なさって、定長朝臣にお命じになってご返事があった。

鶴は大空を目指して帰って行きます。今日晴れわたる気配のする大空のほうへ。すぐに（定家は）殿上の出仕が許されたということである。

〔語釈〕

○後鳥羽院御時 後鳥羽院の在位は、寿永二年（一一八三）～建久九年（一一九八）。○定家卿 藤原。応保二年（一一六二）生、仁治二年（一二四一）没。藤原俊成男。母は美福門院加賀。『新古今集』『新勅撰集』の撰者であり、『千載集』以降の勅撰集入集歌は四六七首。『小倉百人一首』の撰者でも知られる。歌集に『拾遺愚草』、歌論に『近代秀歌』『詠歌大概』、日記に『明月記』などがある。○勅勘 天子から受けるおとがめ。勅命による勘当。一般には、宥免の勅命があるまで謹慎した。○こもりゐられたりける 『玉葉』文治元年十一月廿五日条によると、「伝聞、御前試夜、少将雅行与侍従定家有鬪諍事、雅行嘲哂定家之間、頗及濫吹、仍定家不堪忿怒、以脂燭打雅行了、或云、打面云々、依此事定家除籍畢云々」とある。この時、定家二四歳。○あからさまと 底本「あからさまに」。学・三本の「と」に従う。わずかの間の意。○俊成卿 藤原。永久二年（一一一四）生、元久元年（一二〇四）没。権中納言藤原俊忠男。母は伊予守藤原敦家女。『千載集』の撰者であり、『詞花集』以降の勅撰集に四五二首が入集。数々の歌合の判者をつとめる。歌集に『長秋詠草』、歌論に『古来風躰抄』などがある。↓一六五（『フェリス女学院大学文学部紀要』第四八号、二〇一三年三月）参照。○よみつゝ、 底本「よ」なし。学・三本により補う。○職事 蔵人所の頭、

および五位・六位の藏人の総称。この時五位の藏人は、藤原親雅・定長・親経・定経・宗隆の五人。○つけたりけり
 底本「つけて」。学・三本の「つけ」による。○あしたづの雲ぬにまよふ歳くれて霞をさへやへだてはつべき 「あし
 たづ」に定家を、「雲ぬ」に宮中を暗示している。『千載集』(雑歌中・一一五八)に、第二句を「雲ちまよひし」とし、
 「今上御時五節のほど、侍従定家あやまちあるさまにきこしめすことありて、殿上のぞかれて侍りける、そのとしもく
 れにける又のとしやよひのついたちごろ、院に御けしきたまはるべきよし、左少弁定長がもとに申し侍りけるに、そ
 へて侍りける」の詞書とともに入集している。○御感ありて 底本「て」なし。学・三本により補う。○定長朝臣 藤
 原。久安五年(一一四九)生、建久六年(一一九五)没。藤原光房男。母は藤原為忠女。受領歴任後、藏人、檢非違
 使、弁官の三事兼帯。文治五年(一一八九)参議となり、造東大寺長官、左大弁などをかねる。正三位にいたる。後
 白河上皇の近臣で、兄経房、光長とともに実務官僚として活躍する。○あしたづは雲井をさして歸なりけふおほ空の
 はるゝけしきに 俊成歌と同様、「あしたづ」は定家を、「雲井」は宮中を暗示し、さらに、「おほ空」に天皇の心が暗
 示されている。『千載集』(雑歌中・一一五九)では、詞書に「このよしを奏し申し侍りければ、いとかしこくあはれ
 がらせおはしまして、いまははや還昇おほせくだすべきよし御気色ありて、こころはるよしの返事おほせつかはせ
 とおほせくだされければ、よみてつかはしける 藤原定長朝臣」とあり、「あしたづは霞をわけて帰るなりまよひし雲
 ぢけふやはるらん」と本文を異にして入集している。○ゆりられにけり 九本は底本に同じ。学・三本は「るさ」。

〔解説〕

本説話は、『十訓抄』(第十・三六)に類話が見えるが、内容に相違点は見られない。一方、語釈でも掲げたように、『千載集』(雑歌中・一一五八、一一五九)では、和歌や詞書に異同が見られる。

ところで、本話で、俊成が定長に送った書状が現存している。以下、『古文書時代鑑 上』(東京大学出版会、一九九〇年)より引用しておく。

先日所令申候之拾遺定家

仙籍事尚此旨可然之様

可令申入給之由存候也

且年少之輩各如戲遊事

候強不可及年月候歟而

年已及両年春又属三春

了愁緒難抑候者也

あしたつのくもちまよひ

し年暮てかすみを

さへやへたてはつへき

不堪夜鶴之思独件春

鶯之鳴者也且垂芳察

可然之様御 奏聞所庶幾

候也恐惶謹言

三月六日

釈阿申文

謹上 左少弁殿

(金井由貴子)

一九四 壬生家隆臨終に七首の和歌を廻向の事

〔本文〕

壬生二位家隆卿、八十にて天王寺にてをはり給ける時、七首の歌をよみてぞ廻向せられける。臨終正念にて、其志むなしからざりけり。かの七首の内に、

契あれば難波の里にやどりきて浪のいりひをおがみける哉

〔現代語訳〕

壬生二位家隆卿が、八十歳で天王寺にて臨終を迎えられた時、七首の歌を詠んで廻向なされた。臨終正念をかなえて、その願いはかなったのであった。その七首の内に（詠まれた歌は）、

前世からの縁があるので、難波の里を訪れて宿り、浪に沈む入日を拝むことであつたなあ

〔語釈〕

○壬生二位家隆卿―保元三年（一一五八）生、嘉禎三年（一二三七）没。藤原光隆男。母は、藤原実兼女。嘉禎元年（一二三五）従二位に至る。同二年出家。法名は仏性。『新古今集』撰者の一人。家集に『壬二集』がある。『千載集』初出。○天王寺にてをはり給ける時 天王寺は大阪市天王寺区にある四天王寺。極楽浄土の東門と言われ、極楽往生を遂げる地とされた。天王寺夕陽ヶ丘に家隆の墓がある。○七首の歌 四六九話に全七首が掲載されている。○臨終正念 妄念なく、極楽往生を願うこと。○契あれば難波の里にやどりきて浪のいりひをおがみける哉 西の空に沈む太陽によって西方浄土を観想する日想観の歌。

〔解説〕

『古今著聞集』 卷二三・四六九話に詳細な類話が掲載されているので、引用しておく。

従二位家隆卿は、わかくより後世のつとめなかりけるが、嘉禎二年十二月廿三日、病におかされて出家、七十九にてなられける。やがて天王寺へくだりて、次年或人によりて、俄に彌陀の本願に歸して、他事なく念佛を申さ

れけり。四月八日、宿執や催されけん、七首の和歌を詠ぜられける。

契あれば難波の里にやどりきて波の入日をおがみつる哉

なはの海の雲井になしてながむれば遠くもあらず彌陀の御國は

二なくたのむちかひは九品のはちすのうへのうへもたがはず

八十にてあるかなきかの玉のをはみださですぐれ救世の誓に

うきものと我ふる郷をいでぬとも難波の宮のなからましかば

阿彌陀佛と十たび申てをはりなば誰もさく人みちびかれなん

かくばかり契ましますあみだぶをしらずかなしき年をへにける

かくて九日、かねてその期をしりて、西剋に端座合掌して終られにけり。本尊をも安置せざりけり。「たゞ今生身の佛、來迎し給はんずれば、本尊よしなし」とぞいはれける。さていたゞきあらひて、よきむしろなどしかせられける。

親父身まかりて次の年、服ぬぎて侍てのち、伊勢に下て侍しに、いく程なくて母又身まかりにしかば、いそぎのぼりて侍しに、隆祐のもとより、

立歸り藤の衣やしぼるらんつくしはてにし涙とおもへば

いかばかりおりしく波に立にけん人もかれにしいせの濱荻

一九四話はこの話の抄出である。『十訓抄』には当該話はない。

『古今著聞集』一六二・二二二・二二八・二二四・三三二・四六六・五六二話に家隆の説話が載る。二二二話は、寂蓮の婿になつたこと、西行から『御裳濯河歌合』『宮河歌合』二巻を授けられたことを記した後、

彼卿非重代の身なれども、よみくち世おぼえ人にすぐれて、新古今の撰者にくは、り、重代の達者、定家卿につがひて其名のこせる、いみじき事也。まことにや後鳥羽院はじめて歌の道御さたありける比、後京極殿に申合ま

いらせられける時、彼殿奏させ給けるは、「家隆は末代の人丸にて候也。かれが歌をまなばせ給ふべし」と申させたまひける。

と賞賛している。

(谷知子)

一九五 大納言宗家の室歌に依りて再び迎へらるる事

〔本文〕

宗家大納言とて、神樂・催馬樂うたひて、やさしく神さびたる人おはしき。北方は、後白河法皇の女房、右衛門佐と申ける。宗經の中將うみなどして後、かれづくに成て遠ざかり給けるに、

あふことのたえば命のたえなんと思しかどもあられる身を

とよみてやられたりければ、返事はなくて、車をつかはしてむかへとりて、又とし比になりけるも、やさしくこそ。

〔現代語訳〕

宗家大納言といって、神樂、催馬樂を歌い、上品で古風な趣のある人がいらっしやった。北の方は、後白河法皇の女房、右衛門佐といった。宗經の中將を生みなどした後に、(宗家の訪れが) 途絶えがちになって遠ざかりなされた時、(右衛門佐が)

お逢いすることが途絶えたなら、(私の) 命は絶えてしまうだろうと思っていましたのに、(こうして) 生きておられる身を(不思議に思います)。

と詠んで送られたところ、(宗家は) 返事をせず、車を遣わして(右衛門佐を自邸へ) 迎え入れて、再び一緒に長い年月を過ごしたことも、感心することだった。

〔語釈〕

○宗家 保延五年(一一三九) 生、文治五年(一一八九) 没。中御門流の嫡流。父内大臣藤原宗能、母中納言藤原長

実女。『二十一代集才子傳』に、「相承父祖之門風、神樂・催馬樂之名聲、超越於時輩矣」とある。○神樂 神を祭る時に奏する歌舞。○催馬樂 古代歌謡の一種。もと民謡であったが、平安時代に宮廷の雅樂に取り入れられた。○右衛門佐 二条天皇中宮姝子(高松院)の女房。左馬権頭、藤原能定女(『尊卑分脈』)、法眼覚慶(左京大夫藤原教長子)女説もある(久保田淳『中世和歌史の研究』明治書院、一九九三年)。ここの記述によれば、高松院に出仕後、後白河法皇に仕えたか。○宗經の中將 宗家の長男。『尊卑分脈』に「本名宗國。從四上・左中將」とある。○あふことのたえば命のたえなんと思しかどもあられる身を『続古今集』巻一五に、「恋歌の中に 高松院右衛門佐」として載る。ただし、二句が「絶えば命も」となる。『十訓抄』も同じく「命も」とする。○とし比 関係が修復して長い年月にわたるといふ。

〔解説〕

宗家にまつわる音楽の説話は、ほかに、高倉院の清涼殿作文会に宗家が催馬樂、雅樂の拍子を打って調子を取る話(『古今著聞集』一三一)と、祖父宗忠、父宗能から代々秘伝した神樂歌の秘曲「其駒」を、清盛の命に逆らえず巖島の内侍に教えてしまった話(『古今著聞集』二四五)が見える。

本話は、『十訓抄』に類話が見え、ほぼ同文である。目立った異文は、最後の「やさしくこそ」は『十訓抄』にない。河村全二氏は、この「やさしくこそ」を加えることで、「本話(『十訓抄』十ノ四十六)の歌徳説話が右衛門佐の歌に感じた宗家の情のこまやかさを讃えた話に変貌する」(『十訓抄全注釈』新典社、一九九四年)と評する。しかし、一九六の結末「これらは歌をつかはして心中をあらはせる類なり」と併せて考えると、歌の功德によって二人の関係を修復した歌徳説話と捉えるべきであろう。ただし、実は、右衛門佐は宗家と別れて、老僧禪智と再婚、建春門院左京大夫という娘を設けたらしい(久保田淳・前掲書)。この話の真偽を疑う必要がある。

(蔡雅如)

一九六 徳大寺右大臣公能師子形の枕に歌を隠し入れて女房に贈る事

〔本文〕

徳大寺右大臣、うちまかせてはいひ出がたかりける女房のもとへ、師子のかたをつくれりけり茶碗の枕をたてまつるとて、薄様のなかへをやりて此歌を書いて、思がけぬはさまにかくして入られたりける、

わびつ、はなれだに君にとこなれよかはさぬ夜はの枕なりとも

女房此枕たゞにはあらじとて、とかくして此歌を求出されたりける、いみじく色ふかし。これらは歌をつかはして、心中をあらはせる類なり。

〔現代語訳〕

徳大寺右大臣は、普通の状態では（想いを）言い出しにくい女房の許に、獅子の形をした陶器の枕を差し上げて、（その中に）薄様の中重を破ってこの歌を書いて、（獅子の）思いもかけない隙間に隠してお入れなされた（歌）、

恋に嘆きながら思うのは、せめてお前（獅子の枕）だけでもあの人との共寝に馴れておくれ、私はあの人と共寝を交わさない夜半の枕であっても。

女房はこの枕はただの枕ではあるまいと思つて、色々探してこの歌を見つけ出したのだったが、とても好き心のあることだった。これらは歌をお遣りになって、心中を表すという例である。

〔語釈〕

○徳大寺右大臣公能 藤原公能。永久三年（一一一五）生、永暦二年（一一六一）没。父は藤原実能。母は藤原顕隆女。通称は大炊御門右大臣。右大臣になったのは、平治二年（一一六〇）。多芸多才で、管弦・和歌・朗詠などに優れた。『詞花集』以下の勅撰集に三三首入集。○師子のかたをつくれりけり茶碗の枕 獅子の形をかたどった陶磁器製の枕。「茶碗」は陶磁器。○つくれりけり 一つ目の「り」は、底本「り」なし。学本により補う。二つ目の「り」は、底本・諸本では「り」。版本、『十訓抄』では「る」。○薄様 雁皮で薄く漉いた鳥の子紙。一六一（『フェリス女学院

大学文学部紀要』第四八号、二〇一三年三月) 参照。○なかへ 中重。中に挟みこむもの。中の隔てに加えるもの。布または紙についていう。○わびつ、はなれだに君にとこなれよかはさぬ夜はの枕なりとも 「なれだに」の主語は、獅子の枕。「君」は、相手の女房を指す。共寝をしない「夜はの枕」は、公能。「とこ」は、「常」と「床」、「よは」は「世」と「夜半」の掛詞。「とこ」「夜」「枕」は、縁語。枕に託して逢瀬を願う一首。三句末、底本「よよ」。学・三本に拠る。○枕たゞにはあらじとて 女房が獅子の枕を「たゞにはあらじとて」と思った理由は、獅子の枕という趣向に驚いたからか。平安時代の主な枕は、草枕、木枕、括り枕、布張り枕で陶器製の枕はとも珍しかった。清水靖彦『日本枕考』(一九九一年、勁草書房) 参照。枕の形になっている獅子は、魔除けの霊力を備えた想像上の動物とされていた。宮中では魔除けのため、獅子の置物が狛犬と対にして、「御しつらひ、獅子・狛犬など、いつのほどにか入りぬけむとぞをかしき」(『枕草子』第二六〇段) とあるように、宮中の御帳台の前に据えられた。獅子は魔除けの霊力を有することから、仏教では文殊菩薩の乗る霊獣であった。○色ふかし 好き心があるという意味。底本「け」。学・三本の「色」による。○これら 一九五の話も含めるか。

〔解説〕

「わびつつは…」の歌は、『古今著聞集』、『十訓抄』(一〇ノ四六)では作者は公能であるが、『千載集』(恋四・九〇〇)、『実家集』(三〇七)では、作者は公能ではなく息子の実家。実家自身の極官は正二位大納言で右大臣にはなっていない。『千載集』の詞書、返しの歌を示す。

忍びて物申ける女の、消息をだに通はし難く侍けるを、唐の枕の下に師子つくりたるが口のうちに深く隠してつかはしける

わびつつはなれだに君に床なれよかはさぬ夜半の枕なりとも

(恋四・九〇〇・藤原実家)

返し

嘆きつつかはさぬ夜半の積るには枕もうとくならぬものは

(恋四・九〇一・読み人知らず)

(繩手聖子)

一九八 宗順阿闍梨醍醐の櫻會にて童に歌を送る事並びに中院僧正見物の事

〔本文〕

醍醐の櫻會に、童舞おもしろき年ありけり。源運といふ僧、その時少將公とて、みめもすぐれて、舞もかたへにまさりてみえけるを、宇治宗順阿闍梨みて、思あまりけるにや、あくる日、少將公のもとへいひやりける、

昨日みしすがたの池に袖ぬれてしほりかねぬといかでしらせん

少將公返事、

あまたみしすがたの池の影なればたれゆへしぼるたもとなるらむ

といへりける、時にとりてやさしかりけり。中院僧正見物し給けるが、これをきゝて、いみじと思しめて、同入道右府に對面し給けるつゝあでに、此事をかたりいで給て、やさしくこそおぼえ侍しかとありければ、入道殿、「歌はおぼえさせ給はじ」とのたまひけるを、「そればかりは、などか」とて、「少將公がもとへ宗順阿闍梨つかはし侍し、きのふみしにこそ袖はぬれしか、とよめるに、少將公、荒涼にこそぬれけれ、とぞ返して侍し」とかたり給けるに、堪がたくおかしくおぼしけれど、さばかりのいき佛のねんごろにいひいで給けることなれば、しのび給けるなん、ずちなくおはしけり。和歌の道は、顯密知法にもよらざりけりと、中くいとたうとし。昔の遍昭、いまの覺忠・慈圓などには似たまはざりけるにや。

〔現代語訳〕

醍醐寺の桜會に、童舞が見事な年があった。源運という僧が、その時少將公といって、顔立ちが優れて、舞も傍輩

に優って見えたので、宇治の宗順阿闍梨が見て、思いを募らせたのであろうか、翌日、少将公のもとへ言い送った(歌)、

昨日見たあなたの美しい姿に魅せられてしまった。菅田の池で袖が水に濡れてしまったように、涙に袖が濡れてしほりかねていると、なんとかしてあなたに知らせたいものです。

少将公の返事、

菅田の池に映った大勢の美しい人の影を見てそう仰っているのですから、誰の姿に魅せられて、あなたが袂をしぼっておいでなのか、よくわかりません。

と言ったのは、その時にあたって風雅であった。中院僧正も(童舞を)見物されていたが、このやりとりを聞いて、まことに風流な振る舞いであると感心して、同じく入道右府にお会いになられた折に、この事をお話しになり、「風流なやりとりと思われたことごさいました」と(僧正が)言われたので、入道殿が、「歌は覚えておられますまい」と仰ったところ、(僧正が)「それぐらいのことは、どうして」と言って、「少将公のもとへ宗順阿闍梨がおやりになった歌は、『きのふみしにこそ袖はぬれしか(昨日見たので袖濡れた)』と詠んだのに対し、少将公が、『荒涼にこそぬれけれ(すさまじく濡れましたね)』と返されました」とお話になったから、我慢できないほどおかしく思われたが、これほどの高德の僧が一所懸命に仰っていることなので、笑いをこらえなされたというのは、どうしようもなく辛いことでした。和歌の道は、顕密の知識もまったく関係ないと、むしろ(和歌が)たいそう尊く思えます。昔の遍昭、今の覚忠、慈円などには似ていらっしやらないのではなからうか。

〔語釈〕

○醍醐の櫻會 京都市伏見区の醍醐寺で、毎年三月中旬に行われる観桜を伴う法会。○童舞 子どもが演ずる舞楽。面をつけず、天冠をつけて舞う。演目には、迦陵頻・五常楽・胡蝶・登天楽などがある。○源運 土谷恵氏は、本話で登場する源運を、久安六年(一一五〇)座主玄海による清瀧宮の修造に関わった人物であり、三月一七日の御遷宮

では「御厨子之人、定実阿闍梨・祐源阿闍梨・源運阿闍梨」と、清瀧の御神体の厨子を担いだ一人であったとする（土谷恵『中世寺院の社会と芸能』吉川弘文館、二〇〇一年）。○少將公 源運の稚児時代の名。○かたへ 傍輩。仲間。

○宗順阿闍梨 伝未詳。○昨日みすがたの池に袖ぬれてしぼりかねぬといかでしらせん 「すがた」は「菅田」と「姿」の掛詞。「池」「ぬれ」「しぼり」は縁語。「菅田の池」は、奈良県大和郡山市にある菅田神社近くの池。○少將公返事 底本「公」なし。学・三本により補う。○あまたみすがたの池の影なればたれゆへしぼるたもとなるらむ 贈歌同様、「すがた」は「菅田」と「姿」の掛詞。「しぼる」「たも」とは縁語。○中院僧正 定遍。長承二年（一一三三）生、文治元年（一一八五）没。源顕定男。東寺長者、東大寺別当、仁和寺別当などをつとめ、文治元年の東大寺大仏開眼供養では導師をつとめる。○入道右府 源雅定。↓一七八参照。○荒涼 すさまじく、荒れ果てている状態。○ずちなく どうしようもなく。○顯密知法 顕教と密教、転じて仏教全体の教義に深く通曉し、守り行う人。○遍昭 弘仁七年（八一六）生、寛平二年（八九〇）没。良岑安世男。桓武天皇の孫。仁和元年（八八五）に僧正となり僧位を極め、同年一二月には天皇に宮中で七十の賀を祝われるなど、常に華やかな存在であった。六歌仙の一人で、『古今集』以下の勅撰集に三五首が入集する。○覺忠 元永元年（一一一八）生、治承元年（一一七七）没。関白藤原忠通男。第六十二代天台座主。『千載集』以下の勅撰集に十首入集。○慈圓 久寿二年（一一五五）生、嘉禄元年（一二二五）没。関白藤原忠通男。母は藤原仲光女、女房加賀。九条家の浮沈に応じて四度、天台座主をつとめる。後鳥羽上皇は、慈円の平明な歌風を高く評価し、『新古今集』に九一首が入集する。

〔解説〕

本説話は、『十訓抄』（第一〇・七三）からの抄入説話と考えられている。土谷恵氏によると、桜会は、永久六年（一一一八）に、勝覚によって祈雨の報恩に始められた法会であり、年中恒例の法会となった桜会は、鎌倉前期まで清瀧会の名で寺中では呼ばれていた。この清瀧会が、最盛期を迎えたのが一二世紀末の座主勝賢のもとであり、その中心にあったのが、童舞であった。勝賢のもとで清瀧会の童舞は、供養舞から入調の舞へと転化したのが、鎌倉末期にな

ると桜会は消失し、一方で、童舞は延年と関わり演じられはしたが衰退していく。土谷氏は、『十訓抄』(第一〇・七三)、『古今著聞集』(巻五・二二一段)に関して、桜会と童舞の最後の輝きを描くエピソードを捉えた説話であると論じる(土谷恵氏前掲論文)。

(金井由貴子)

一九九 丹波守玉淵が女白女歌を詠みて祿を賜ふ事

〔本文〕

亭子院、鳥養院にて御遊ありけるに、とりかひといふことを、人々によませられけるに、あそびあまたまいりあつまれる、其中に、歌よくうたひて、こゑよきもの、ありけるをとほるに、「丹波守玉淵がむすめ白女」となん申けり。御門、御船めしよせて、玉淵は詩歌にたくみなりしものなり、其女ならば此歌よむべし、さらばまこととおぼしめすべき由仰らるゝに、程へずよみける、

ふかみどりかいある春にあふときは霞ならねど立のぼりけり

御門ほめあはれみ給て、御うちぎ一重をたまはせけり。其外、上達部・殿上人、をのくきぬ、ぎてかづけられければ、二間ばかりにつみあまりけるとなむ。

〔現代語訳〕

亭子院が、鳥養院で音楽のお遊びをなさったときに、鳥飼といふことを、人々に詠ませなされたところ、遊女がたくさん参集して来た、その中に、歌をうまく歌って、声もすばらしい者はいるかとお尋ねになったところ、「丹波守玉淵の娘の白女」と(人々が)申し上げた。帝は、御船を呼び寄せて、玉淵は詩歌に秀でた者であったから、その娘なら歌を詠みなさい、それによって本当のことと信じようとおっしゃったところ、すぐに詠んだ(歌は)、

深緑色に包まれ、生き甲斐のある春にめぐりあうときは、霞が空に立ち昇るように、

私も宮中に昇殿できたことですよ。

帝は賞賛し感動なさって、御桂一重を下さった。そのほか、上達部・殿上人、それぞれ衣を脱いで肩におかけになったので、二間ほどに積みきれないほどになったという。

〔語釈〕

○亭子院 宇多院。讓位後の御所が亭子院であったための呼称。宇多院は、貞観九年（八六七）生、承平元年（九三二）没。光孝天皇皇子。母は班子女王。仁和三年（八八七）即位、寛平九年（八九七）讓位。○鳥養院 摂津国。大阪府摂津市三島町鳥飼にあった離宮。○とりかひといふことを、人／＼によませられる。地名の「鳥養」を題にして、宇多院が人々に歌を詠ませた。○丹波守玉淵がむすめ白女 丹波守玉淵は、大江音人男。朝綱の父。○ふかみどりかある春にあふときは霞ならねど立のぼりけり 「どりかい」に「鳥飼」を掛ける、物名の歌。「霞」「立」「のぼり」が縁語。『大和物語』一四六段は、初句「あさみどり」、第三句「あひぬれば」。霞の色なので、「あさみどり」の方がよい。○御うちぎ一重をたまはせけり 歌の出来栄えに感動して、桂を賜ったのである。歌の力である。

〔解説〕

『大和物語』一四六段・『大鏡』道長伝・『十訓抄』卷一〇・五〇話に同話が載る。『大鏡』は白女と玉淵女を別人とし、この話の直前に白女という遊女の歌徳説話を載せる。『十訓抄』は『古今著聞集』と同じく、白女と玉淵女を同一人物とするが、直後に源実が筑紫に下向するときに和歌を詠み、『古今集』に撰ばれたことが記されている。

（谷知子）